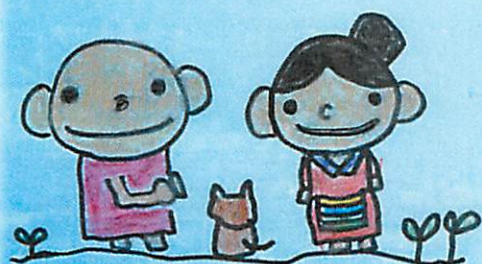




ESD スタディーツアー報告書

北インドで難民の人々と共に考える「希望」への道

2011. 8. 24~9. 2 インド(デリー・ダラムサラ)



2011 年度スタディーツアー実行委員会

聖心女子大学 永田佳之研究室



-ESD Study Visit Programme 2011-

Thinking about the Road to Hope with Refugees in North India

All rights reserved. No portion of this report may be reproduced, by any process or technique, without the express written consent of the authors.

Copy rights © 2011 by Yoshiyuki Nagata Laboratory, University of the Sacred Heart

Published in December 2011

Edited by

**Yoshiyuki Nagata, Naoki Mizushima, Yumiko Shimosato, Mari Tawara,
Chikako Enomoto, Tamami Yamazaki and Rei Horie**

Printed in Japan

第一部

スタディーツアー概要とわたしたちの思い

はじめに

〈こたえ〉のない〈問い〉を生きていくということ

本年4月、福島第一原発事故後の混乱の最中、東日本大震災後初めての学期がスタートした。通例よりも2週間遅れの学期がはじまり、どこことなく不安気な学生たちを目の当たりにして、ふと浮かんできたのが冒頭の言葉である。

地震や津波などの自然災害や原発事故という人災など、現代社会は予測しつくせない事件がいつ何時おこるのか皆目見当がつかない。それでも若者たちは不安定性や不確実性、危険性を帯びたリスク社会を生き抜いていかねばならない。

実際、新学期がはじまって出会った学生の中には、東北などで被災された人々に何かをしたいと思いつつも、あまりの惨事を前に何もできないままにいる自分にもどかしさを感じる学生は少なくなかった。不安であるがゆえに直ぐにでも何かにすがりつきたい、でも震災後、すがりつくには頼りないほどの辿々しさを、私たちの大人社会は露呈してきたのではないか。

今回のスタディーツアーは、こうした予期せぬ事態が進行する中で構想された。選ばれた地は、絶望的な状況を経ながらも決して希望を失わないチベットの民の暮らすインドのダラムサラである。故国を追われながらも、独自の文化を継いで、新たな文化を再創造しつづけるチベットの人々の国際的な支援活動は、国連高等難民弁務官（UNHCR）の功績の中でも最も成功した事例と言われる。絶望の淵に置かれながらも希望を決して見失わなかった民の知恵と勇気と教育にふれて欲しい——そんな想いがあった。

また、チベットの亡命政府のあるダラムサラはダライ・ラマ法王のお膝元である。法王はチベット仏教を代表する最高指導者であり、精神的な価値の大切さや「普遍的責任」の重要性、世界平和を説きつづけるノーベル平和賞の受賞者でもある。その名前の意味するとおり「知恵の大海」と言われ、仏教を科学として、思想として、宗教として、世界中の人々に説き、その教えは多くの若者をも魅了している。

かねてより筆者は、このような法王に学生を出会わせたいと願ってきたが、この度の震災とその後の社会情勢に鋭敏に反応している学生を目の当たりにし、その想いはよりいっそう強くなった。世の疑問に回答してくれる大人は大学であれば容易に見つけられるのかもしれない。しかし、あえてダライ・ラマ法王にこだわったのには理由がある。

それは、法王は「答えのない問い」を抱く若者に、即応するのではなく、答えを自分で見出せるように導くような力、もしくは答えは見出せなくてもしっかりと問いを受け留めて生きていくように勇気を与えてくださる力を持っていると思われるからである。

学生たちは、ひと月以上かけて、法王にどんな質問をしたらよいのか、するべきなのかを考え続けた。上でふれたように、それぞれに 3.11 後の不安にもとづく問いを抱えている。しかし、あまりに個人的な悩みを打ち明けては、法王への質問に相応しくない。ダライ・ラマ法王はカウンセラーも精神科医でもないからである。学生たちは、互いに話し合い、自身で黙考し続けた。その結果、ごく限られた問いのみが、たとえ個人的な悩みに端を発していたにせよ、普遍的な問い、深い問いかけへと深められたと言っ

てよい。

「震災後、しんどい思いをしている人がたくさんいるけれど、身代わりになることはできません。多くの苦しみを背負った他者を前に無力感にさいなまれることもあるのですが、どうしたらよいのでしょうか？」

「法王がもしある学校の校長先生だとしたら、教育の中でいちばん大事にしたいことは何でしょうか？」

「表面的なボランティアに疑問を感じています。真のボランティアとは何でしょう？」

「法王は20年前にブラジルで開催された地球サミット関連の国際会議で＜普遍的責任＞という概念を提示されました。もし来年再び開催される地球サミット（Rio+20）に基調講演者として招かれ、世界の人々にメッセージを届けることになった場合、今度はどのような概念を提示されますか？」

「世界平和のためには相互理解が不可欠であると言われます。でも、こちらが他者を理解しようと努めても、相手がこちらに無関心であり、耳を傾けない場合は、どうしたらよいのでしょうか？」

さて、私たちの旅はインド独立の父と称される偉人の足跡をたどるところから始まった。マハトマ・ガンディーが火葬されたデリー市内のラージ・ガートを皮切りに、ガンディーが凶弾に倒れた中庭をもつ旧ビルラー邸（ガンディー記念博物館）、国

立ガンディー博物館などを炎天下の中、歩きつづけた。そして、デリーを未明の3時に出発し、一路、ガンディーを敬愛するダライ・ラマ法王の亡命政府のあるダラムサラに向かった。豪雨のため予約していた国内便がキャンセルとなり、急きょ半日以上バスにゆられてひたすらインド大陸を北上することになったのである。インド製のミニバスによる長距離移動に耐え、ようやくたどり着いた私たちを迎えてくれたのは大都会のデリーでは経験できなかったチベットの人々の笑顔と心温まるもてなしであった。以後、ダラムサラで学生たちが出会った人々や文化、自然は、普段の大学での講義では得られないものの連続であった。そうした出会いを通して、彼女たちが何をどのように受け留め、感じとり、大震災後の社会をいかに生きていこうとしているのか、またはダライ・ラマ法王からどのような〈こたえ〉をいただき、それに対してどのような想いを抱いて帰国したのか、その詳細については、この報告書をご一読いただければ、幸いである。

最後になるが、このスタディーツアーを企画・実施するにあたり、お世話になった方々に心よりお礼を申し上げたい。法王への謁見をはじめ、チベット子ども村（TCV）での滞在や交流プログラムは、ダライ・ラマ法王日本代表部事務所（チベットハウス）のラクパ・ツォコ氏や在デリー・ダライ・ラマ法王事務局代表のテンパ・ツェリン氏、TCV 総長のツェワン・イエシ氏及びTCV 教育局長のテンジン・サンポ氏、チベット中央行政情報・国際関係局のクンサン・ドルジー氏及びソナム・サングモ氏、そして仏教論理大学で研究を重ねておられる山口直子氏のご尽力なくしては実現し得なかった。また、学生たちが事前学習のために訪問した団体や専門家の方々にもお礼を申し上げたい。さらに、スタディーツアーに初めてご参加いただき、学生たちの学びの深化のプロセスを共にして下さった教育学科の水島尚喜先生、ならびに本ツアーに特別のご理解を賜った学内関係者の皆様にもお礼を申し上げます。

2011年度ESDスタディーツアー・世話人

永田 佳之

目 次

第一部 スタディーツアー概要とわたしたちの思い

はじめに.....	i
目次.....	iv
1. 訪問国基礎情報.....	1
2. スタディーツアー日程表.....	2
3. 参加者一覧.....	4
4. 旅の日記 ～Letters from Dharamsala～	
1 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “Mahatma Gandhi” ～.....	9
2 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “Tibetan Culture” ～.....	12
3 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “The Tibetan Institute of Performing Arts”～.....	15
4 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “難民(ダラムサラとレセプションセンター)”～.....	17
5 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “問答教育”～.....	20
6 日目の日記.....	23
7 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “TCV で出会った言葉たち”～.....	24
8 日目の日記.....	26
9 日目の日記.....	27
10 日目の日記	
～Letters from Dharamsala “サステイナブル目標”～.....	28
5. ダライ・ラマ法王との対話の記録	
(1)ダライ・ラマ法王に関して.....	33
(2)ダライ・ラマ法王インタビュー.....	34

6. チベット子ども村 (Tibetan Children's Villages)	
(1) 概要と暮らしの様子.....	43
(2) 授業風景.....	44
(3) お会いした先生方—校長先生やテンジン先生のクラフト工房—.....	46
(4) 感謝の会(フェアウェルパーティー).....	48
(5) 歌.....	49
(6) インドの旅で私たちが感じたこと、考えたこと.....	50
7. 感想	
(1) 水島 尚喜 「TCV の美術教育環境について」.....	59
(2) 堀江 麗 「希望のメッセージ」.....	61
(3) 山崎 玉美 「“運命” とは—インド、ダラムサラが導く果てに—」.....	63
(4) 田原 茉莉 「浄化の旅」.....	65
(5) 榎本 慈子 「心」.....	67
(6) 下里 祐美子「難民がつなぐ希望への道」.....	69
8. インド写真館	72

Part II English Report

Forward	83
1. Programme Schedule	86
2. List of Participants	88
3. Our Feelings—Impressions of the Study Programme—	
(1) Naoki Mizushima “Art Education in TCV”	91
(2) Rei Horie “Message for Hope”	92
(3) Tamami Yamazaki “Fate is Something”	94
(4) Mari Tawara “A Journey of Sublimation”	95
(5) Enomoto Chikako “Meaning of my life”	97
(6) Yumiko Shimosato “A Road to Hope Connected by Refugees”	99

1. 訪問国基礎情報

インド共和国 (Republic of India)

人口：約 12 億 1000 万人 (2011 年国勢調査より)

面積：約 329 万km² (日本の約 9 倍)

首都：ニューデリー (New Delhi)

政体：連邦共和制

宗教：ヒンドゥー教徒 80.5% イスラーム教徒 13.4% キリスト教徒 2.3%

シク教徒 1.9% 仏教徒 0.8% ジャイナ教徒 0.4% (2001 年国勢調査より)

識字率：74%

通貨レート：インドルピー 1 ルピー=約 2 円 (2010 年 11 月現在)

時差：-3.5 時間



ドラヴィダ人が造ったとされるインダス文明が興ったのは約 5000 年前の紀元前 2500 年頃。紀元前 1500 年頃にはアーリア人によって征服され、バラモン教が成立。紀元前 5 世紀頃、仏教の開祖ゴータマ・シッダルタが誕生した。320 年グプタ朝がインドを統一し、この頃にヒンドゥー教が誕生した。その後 1260 年、マムルーク朝が成立しイスラームによる本格的なインド支配が始まった。1857 年イギリスによる植民地支配が強まる中、セポイの反乱が発生。1950 年、インド憲法が発布されインド共和国が成立した。初代首相としてネルーが就任した。

ダラムサラ (Dharamsala)

インド北部の標高 1500m~1800m に位置する都市。チベット亡命政府をはじめ、チベット仏教倫理大学・チベット子ども村・チベット文献図書館などがあり、チベット仏教文化の拠点。現在、約 6000 人以上のチベット人がここで生活をしている。丘の上には、ダライ・ラマ法王の公邸ナムギャルゴンパ寺(Namgyal Gompa)がある。




(参考資料)

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所 HP : <http://tibethouse.jp/>

地図 : <http://tcp-np.com/nepal/index.html>

国旗 : <http://plaza.rakuten.co.jp/nanminfamily/5002>

2. スタディーツアー日程表

行程			滞在先
1日目 8/24(水)	11時30分	成田国際空港 出発 (約5500km離れたシンガポールに向けて出発。)	
	19時05分 22時10分	シンガポール国際空港経由 インディラ・ガーンディー国際空港 到着 (約1日がかりの大移動。現地添乗員の方に歓迎の花輪を首からかけていただきました。)	デリー
2日目 8/25(木)	午前	ラージ・ガードを見学 (ガーンディーが火葬された場所。緑で埋め尽くされた庭をゆっくり散策しました。) ガーンディー博物館を見学 (白い2階建ての建物。インド特有の暑さを肌感じながら見学しました。) 国立現代美術館を見学 (3階建ての建物内には、風景画、民族画、彫刻などが多数展示してありました。)	デリー
	午後	テンパさんと会食 (ダライ・ラマ法王代表事務局のテンパさんとお会いし一緒にお食事をさせていただきました。) ガーンディー記念館を見学 (ガーンディーが最期を迎えた場所。地元の方も多く参拝・見学をしていました。)	
3日目 8/26(金)	終日	デリーからダラムサラへ移動 (車で約15時間をかけ、ダラムサラを目指し約530km北上しました。ダラムサラ到着時はスコールに見舞われました。)	チヨノールハウス
4日目 8/27(土)	午前	チベット難民受け入れセンターを訪問 (ヒマラヤを越えてきた子どもたちと初めて会いました。センター長さんから、近年の亡命状況などについてお話をいただきました。) チベット文化村を見学 (曼荼羅の制作や仏像の制作などに取り組む学生達に出会いました。)	 チヨノールハウス
	午後	仏教論理大学で学ばれている山口さんと面会 (ナムギャルゴンパ寺でインドでの生活、問答とチベット仏教についてお話をいただきました。) ナムギャルゴンパ寺にて問答を見学 (僧侶の方々による問答を見学しました。問答の迫力を間近で体験することができました。)	
5日目 8/28(日)	午前	チベット子ども村(TCV)へ移動 (少し山を下り、チベット難民の子どもたちが暮らす施設に行きました。)	TCVゲストハウス
	午後	敷地内散策 (TCVの敷地内には、子どもたちの家、学校、校庭、お寺などの施設が揃っており、その中をゆっくり歩いて散策しました。)	



6日目 8/29(月)	午前	TCV幼稚園を訪問 (小さな子どもたちが一人ひとり、小さな机に向かって鉛筆を動かしている姿が印象的でした。)	TCVゲストハウス
	午後	ダライ・ラマ法王に謁見・対談 (ナムギャルゴンパ寺にて法王との面会を果たしました。対談はとても和やかな雰囲気の中で行われました。)	
7日目 8/30(火)	午前	ダライ・ラマ法王の公開講話に参加 (アジア人向けに開催された講話。早朝から多くの人が入場口に列をつくっていました。)	TCVゲストハウス
	午後	TCV高校を訪問 (数が限られている教科書を共有して使っている姿が印象的でした。)	
8日目 8/31(水)	午前	TCV小学校を訪問 (児童がとても能動的で、児童と先生と一緒に授業を創り上げていました。) TCV中学校を訪問 (生徒全員が心と体を使って全身で問答に取り組んでいました。)	TCVゲストハウス
	午後	テンジン先生のクラフト工房見学 (資源をリサイクルし色んな教材に変化させてしまうテンジン先生にお話を伺いました。) 感謝の会(フェアウェルパーティー)を開催 (お世話になったTCV関係者の方を招待し、お別れ会を開きました。)	
9日目 9/1(木)	午前	TCVを出発 (滞在中、私達のお世話をしてくださった方々に見送られTCVを後にしました。) 尼寺を見学 (英語の授業や給食室などを見学して回りました。)	機中泊
	13時05分	ダラムサラ空港 出発 (往路は車で移動した距離を、復路は国内線にて約1時間で移動しました。)	
	23時25分	インディラ・ガーンディー空港経由	
10日目 9/2(金)	9時25分	シンガポール国際空港経由	
	17時30分	成田国際空港 到着 (大きな事故に巻き込まれることなく、全員揃って無事に帰国することができました。)	



3. 参加者一覧

堀江 麗

Horie Rei

1年 基礎課程

Email:rei.horie@gmail.com

好きなこと・もの：美女と野獣

インドへのキャッチフレーズ：

Others before self

一言コメント：3カ月近くが経った今になって、インドでの学びを深く実感しています。



山崎 玉美

Yamazaki Tamami

2年 教育学科教育学専攻

Email:tamami0316happysmile@yahoo.co.jp

好きなこと・もの：人との出逢い、笑顔

インドへのキャッチフレーズ：運命とは？

一言コメント：“運命×慈愛教育”。ダラムサラの地を去り、帰りのデリー空港で感じた想いです。人生への儚い問いを追い求めながら、これからも“今しかない今”を精一杯、周りの方とハッピーに生きていきたいです。

インドでの学びに深く感謝致しますと共に導いて下さった先生方、皆様に御礼申し上げます。ツジェチェ。



榎本 慈子

Enomoto Chikako

3年 歴史社会学科国際交流専攻

Email:chikako.enomoto@yahoo.co.jp

好きなこと・もの：人のお話を聴くこと

インドへのキャッチフレーズ：warm

heartedness・friendship comes from trust

一言コメント：7月13日に参加することが決まって以降、日本で学び、インドで学び、知識はもちろん、色んな技術についても学ばせていただくことができました。このような機会を与えてくださった永田先生や家族に深く感謝申し上げます。



田原 茉莉

Tawara Mari

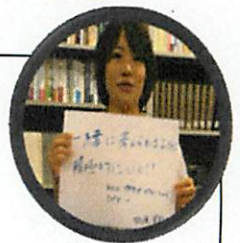
3年 教育学科教育学専攻

Email:dona2_awake_greentea@yahoo.co.jp

好きなこと・もの：釣り

インドへのキャッチフレーズ：一緒に考えられるように積極的にいく

一言コメント：出会った方々をはじめ、縁に溢れた Study Tour でした！



☆この写真は初顔合わせの際に書いた“インドで自分がしたいこと”のフレーズです。

下里 祐美子

Shimosato Yumiko

学部研究生

Email: Song1016mc@yahoo.co.jp

好きなこと・もの：食べること、寝ること、音楽を聴くこと

インドへのキャッチフレーズ：まだまだ掴みきれないインド

一言コメント：腹痛を怖れて、出発前は毎日ヨーグルトを食べていたわたし。
そのかいあってか腹痛にはならず、インドの文化や食事を五感を使って味わう
ことのできた忘れられない10日間でした！タシデレ！



水島 尚喜 先生

Mr. Mizushima Naoki

教育学科

Email: mizusima@u-sacred-heart.ac.jp

好きなこと・もの：音楽鑑賞（ジャズ）、フィルム
カメラ蒐集

インドへのキャッチフレーズ：魂の故郷へ

一言コメント：今回、学生諸子の皆さんと参加で
きましたことを心より感謝いたします。日頃は諸
事に忙殺される時間帯が多い中、このツアーでは、
自分自身が様々な方々との御縁によって「生かさ
れている」ことが、はっきりと自覚できました。
今後ともこのスタディーツアーが、創造的に発展
することを祈念しております。



永田 佳之 先生

Mr. Nagata Yoshiyuki

教育学科

Email: yoshy@pobox.com

好きなこと・もの：みんなで飯を食うこと
インドへのキャッチフレーズ：ダイバーシ
ティ！

一言コメント：希望はプロセスそのもの。
だからこそ持つに値するのだと思います。
法王から授かった言霊を抱いて歩いていっ
て下さい。



☆この写真は帰国直前のデリー空港で書いた“インドスタディーツアー完”への想いです。

4. 旅の日記

～Letters from Dharamsala～

毎日の記録と一緒に、インドの情報をところどころにちりばめました

1日目

訪問場所

成田国際空港、シンガポール国際空港、
インディラ・ガーンディー国際空港

八月二十四日(水) 日直 堀江



<感想>

私にとって未知の世界であるインドに足を踏み入れました。地に足がつかないような不思議な気分である中、迎えに来た車の運転手の方がお花の首飾りを全員にかけて下さったのが嬉しかったのをよく覚えています。日は既に落ちていたため、ホテルへ直行しました。

車と自転車の間のような乗り物、あふれかえる人々。道路に横たわる物乞いの人々……。窓の向こうにはインドらしい混沌とした風景が広がっていました。

これから起こる何かへの90%の期待と10%の不安を胸に、この日は眠りにつきました。

Letters from Dharamsala

Mahatma Gandhi

モハンダス・カラムチャンド・ガンディー (1869 年 10 月 2 日～1948 年 1 月 30 日)。

Mahatma は、敬称で“偉大なる”という意味です。1888 年 9 月、弁護士を志したガンディーは法律を学ぶためロンドンに留学し、22 歳までの約 3 年間をロンドンで過ごしました。その後、一度インドに帰国したガンディーでしたが、なかなか安定した職につくことができませんでした。そんな折、南アフリカでの仕事を紹介されたガンディーは 1893 年 4 月 24 歳で南アフリカへ渡り、ここで奴隷制の廃止を訴えることに尽力しました。1915 年、インドに帰国したガンディーは 46 歳になっていました。以降、78 歳でその生涯を閉じるまで彼はインド国内に留まりました。帰国後のガンディーは、外国製品非買運動に取り組み、1930 年 3 月 12 日には 78 人の僧と共に“塩の行進”をスタートしたのです。ガンディーが亡くなる一年前、インドは英植民地からの独立を果たしました。しかし、この独立はインド・パキスタン分裂というガンディーが望んだ独立とは違う形のものだったのです。

Raj Ghat

デリー市内に 3 つあるガンディー関連施設の一つです。市街地にあるにも関わらず、一步敷地内に足を踏み入れると、とても静かな空間が広がります。メインロードをまっすぐ進むと、低い塀に囲まれた四角い形をした広場が目に見えてきます。その地面には、一面芝生が広がっています。その中心に、一つの小さな炎が灯されています。それは、ガンディーを火葬したときに使われた火です。この火は、絶えることなく灯りつけています。祭壇にはガンディー最期の言葉が、ヒンドゥー語で「ヘイ・ラーム」(おお、神よ！)と刻まれています。今も参拝者が絶えず命日や誕生日には記念の催しが開かれます。

National Gandhi Museum

Raj Ghat から道路を渡った反対側にあります。二階建ての資料館には、数多くの展示物が飾られていました。一階には“塩の行進”についての展示がありました。行進の順路や年表などが細かく記されています。何より目に留まったのは、各地で人々と触れ合うガンディーを撮影した無数の写真でした。二階には、部屋が大きく二つに分かれています。一つの部屋には生前に使用していた数々のモノが並べられています。下駄のようなサンダルや入れ歯のレプリカなど、当時の生活を感じさせるものでした。もう一つの部屋には、ガンディーが最期に着ていた衣服が展示されていました。本物のため血の跡がくっきりと残っているのが印象的でした。この施設には彼の思い出がたくさん詰まっています。

Gandhi Smirit

Birla House(ビルラハウス)として知られている三つ目の施設です。ここはガンディーが最後の144日を過ごした場所であり、また暗殺された場所でもあります。暗殺された場所までの道には、ガンディーの足跡をかたどった石が並べられています。敷地内には“World Peace Gong”という文字が刻まれ、周囲に世界中の国旗が書かれた丸い鐘がありました。地元の人のみならず、外国からも多くの人が訪れ、この鐘を鳴らします。さらに奥に進むと、小さな平屋が並んだ建物があります。中では、ガンディーと同じように女性たちが糸車を廻し、糸を紡いでいました。その音はまるで当時に引き込まれそうになる独特な音でした。



1948年1月30日午後5時17分
彼はこの場所で暗殺され、最期を迎えました。



『塩の行進』をイメージしたモニュメント
National Gandhi Museum にて

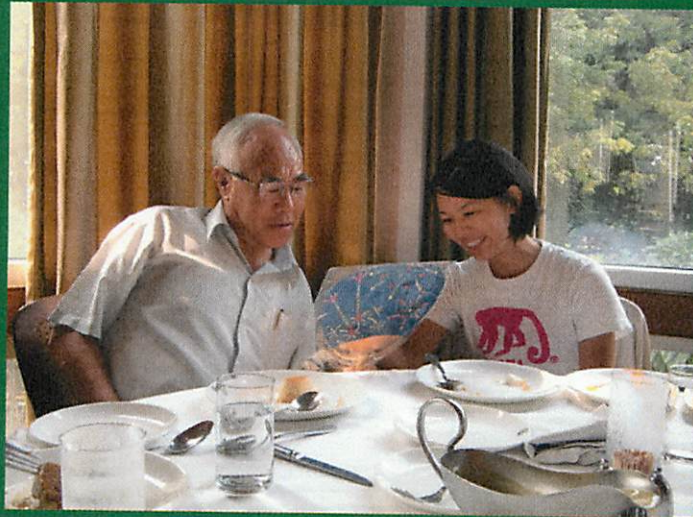


Gandhi Smirit 内を散策

2日目

訪問場所

ラージガード、ガーンティー博物館、国立現代美術館、
インディアナショナルセンター、ガーンティー記念館



八月二十五日（木）日直 堀江

<感想>

ガーンティーについての学びを深めた1日でした。様々な施設を回りましたが、どこにおいても彼の強い意志を感じることができました。最期に使った白シーツと枕のみのベッド、言葉、生活様式すべてに彼の一貫された人生そのものが映し出されていた気がしました。

ランチタイムにはダライ・ラマ法王の妹さんの旦那さんであるテンパさん（在テリ法王事務所代表）にお会いすることができました。明るく、そして慈悲の心に溢れた方で、とても有意義な時間を過ごすことができ、ダラムサラでチベットの方々、そして法王にお会いするのが更に楽しみになりました。

Letters from Dharamsala

Tibetan Culture

チベットの概要

—地理—

チベットは中華人民共和国の最西部に位置するチベット高原を中心としたエリアを指します。東西約 2500 k m、南北 1500 k m にわたり面積は約 230 k m²、日本の 6 倍の広さもあります。中心地であるチベット高原は世界で最も広い高原でありながら、生活環境が非常に厳しい場所となっています。平均高度はチベット全体で約 4000m になっています。



—気候—

チベットの緯度は日本の九州より南にありますが、平均高度が 4000m 以上もあり、ヒマラヤ山脈などの高い山脈に四方を囲まれているため、高原性寒冷地帯に属しています。気候の特徴としては平均気温が低い点、乾燥している点、強風が吹くことが多い点が挙げられます。

季節は夏と冬の 2 シーズンがあります。5 月～9 月の夏は最高気温が 15～20℃、最低気温が 5～-5℃となっています。10 月～4 月の冬は最高気温が 5～15℃、最低気温が -10～-20℃で、雨季(6 月～9 月)と乾季(10 月～5 月)があります。

—チベットの民族—

チベット人は自分たちを“プー”(意味：能力がある)と呼んでおり、その起源は中央アジアからトランス・ヒマラヤを経てチベット高原に定住した人々という説が有力です。チベット人の人口は、チベット自治区内に約 200 万人、世界全体で 600 万人となっていて、主な言語はチベット語です。



—服装—

伝統的な民族衣装のチュパはドテラの袖と裾が長くなった服で、袖は膝のあたりまであり手のひらまで隠れます。男性は袖が膝まであり、女性と僧侶はくるぶしまであるのが特徴です。素材は毛皮やウールで非常に暖かく、男性は下にズボンををはき、女性はパンデンというエプロンを身につけています。

Chonor House(チノールハウス)



部屋とホスピタリティ

実際に宿泊させていただいたダラムサラの宿です。

文化村で制作されたチベット伝統工芸品が置かれている室内は、建築や照明、壁の絵などどれもがチベットの文化財としての価値を担っています。

チベット人のホスピタリティと優しさに包まれた文化を、全身で感じることもできる宿空間です。

3日目

訪問場所

テリーから車に乗り、ダラムサラへと移動
ナムギャルゴンパ寺を訪問



八月二十六日(金) 日直 山崎

<感想>

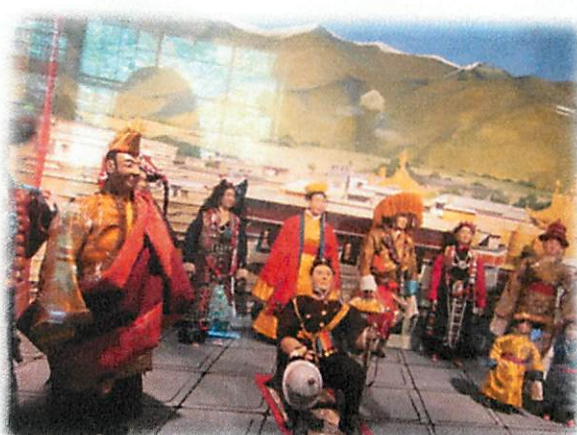
早朝にテリーを出発し、ダラムサラを目指して車で道を進みました。
車から見える景色は、テリーの様々な人間模様が感じられる町並みから何か神秘性を感じさせるような不思議な山並みへと移り変わっていきました。子どもたちが学校へ登校する様子や親子が手を繋いで歩く姿、ゆったりと坂道を登る牛など、都会の喧騒からは想像もできない豊かな時間がそこには流れていました。ダラムサラに向かう途中では車から降りて、空気の良い地にてマサラティをいただき、地元の方と共に壮大な景色を眺めながら時を過ごしました。

Letters from Dharamsala

The Tibetan Institute of Performing Arts

文化の継承

チベットの文化を継承し続けていくための基盤として、チベットの伝統工芸品の製作を行っています。



昔の手法を大切にしながらチベットの文化を若者が受け継ぎ、ひとつひとつ手作りで作っている姿に“今”に受け継がれている文化の在り方を感じることができます。



4日目

訪問場所

ダラムサラにて、レセプションセンター（難民受け入れセンター）
千ベツ文化村を訪問。



八月二十七日（土）日直 山崎

<感想>

宿泊先である Chonor House を出発し、千ベツ難民の最初の受け入れ場所であるレセプションセンターを訪問しました。ヒマラヤ山脈を必死の想いで越えてきた人々がはじめて踏み入れるその地はとても温かなぬくもりに溢れていました。ここに到着するとまずは心身の健康チェックを行い、お食事などが出されます。治療が必要な場合はここで治療を受けることができます。ここで生活する子どもたちはみな、自分の力でヒマラヤ山脈を越えてきた子どもたちです。千ベツ人としての想いと文化継承、生命存続について考えさせられ、その想いを次に訪問した文化村にて形として体感することができました。「文化の継承」とは、「受け継ぐ」とは、一体何なののでしょうか。4日目を過ごし、人生の深い問いに触れた瞬間でした。

Letters from Dharamsala

難民

(ダラムサラとレセプションセンター)

ダラムサラという地

ーダラムサラへやってくる人々ー

インド北部にあるダラムサラという地はチベット仏教を信仰するものにとっては特別な場所です。

1959 年、チベットで起きた中国に対する民衆蜂起を機に、これ以上のチベット人の犠牲を抑えるためにダライ・ラマ法王はインドへ亡命し、ダラムサラに亡命政府を樹立しました。

亡命政権樹立以降、法王を追ってチベットの地からダラムサラへやってくる人々は、チベットからヒマラヤを越え、ダラムサラにたどり着きます。今でも多くの人々がヒマラヤ越えをしますが、その人々と共に最初に難民として逃れてきた人々の子孫が 2 世、3 世として生活しています。

通常、難民として逃れてきた人々が生活する土地=難民キャンプが隣接するというイメージを抱くのではないのでしょうか？

しかし、ダラムサラの街並みはチベット文化に溢れていました。本当にここはインドの国内なのだろうかと思うほどでした。タルチョ（説明：願いや経文が書かれた旗で祈祷旗として用いられています。5 元素を表した黄色（地）、青（水）、赤（火）、緑（風）、白（空）とあり風に乗って祈りを広めてくれると信じられています）がかけられた木々と、僧侶の方々の日常に近いことが印象的でした。道路に沿って開かれた商店は活気づいていて、朗らかな人々が多かったです。また、至る場所にダライ・ラマ 14 世の御影が飾られていたのを見かけ、ここに住むチベット人同士のコミュニティの結束の強さを感じました。

—生活の歴史が語るもの—

にぎやかな街並みとそこに住む人々の温かさは、彼らのルーツであるチベット自治区で様々な悲劇が起きていることを忘れてしまいそうになるほど豊かでした。ここダラムサラの地にチベット文化が根付いていることを肌で感じます。こうやって2世、3世へと家族の営みが続いているのです。

レセプションセンター(難民受け入れセンター)

—ゴールでありスタート地点—

チベット人を受け入れる施設として、ダラムサラには難民受け入れセンターがあります。年間2000人近いチベット人が難民としてやってきます。

しかし、中国政府が国境近くのネパール人に協力を要請しダラムサラへやってくることが難しくなりつつあります。そのため、ダラムサラへやってくる人数が2000人前後から600人前後へと大幅に減ってしまいました。

ネパールのカトマンズにも施設があり、人々はまずカトマンズへたどり着きます。カトマンズからデリー、そしてこの地へやってくるのです。人々の心理的フラストレーションは高く、ようやくダラムサラからの迎いのバスで安堵するそうです。

彼らは全員ダライ・ラマ法王に謁見することができ、彼らの中には謁見できることを目標にヒマラヤを越えてくる者もいます。謁見すると同時に彼らは難民認定証を受け取ることが決まっています。

彼らの多くは法王に謁見できること、またチベット人として教育を受けることを望んでダラムサラへやってくるため、チベットから来るほとんどは6～13歳の子どもだそうです。レセプションセンターでは様々な情報をもとに彼らの学校、仕事を割り振ります。子どもたちは各地にあるチベット子ども村へ行くことになります。ダラムサラの地で再スタートが始まるのです。

—センターの様子—

今回の訪問ではセンター内も見学させていただきました。センター内は今年2月に新設されたこともあり、とてもきれいでした。寝室も見せていただきましたが、ダラムサラでの毎日への期待より親と離れてしまった悲しみが強く感じられました。難民同士がお互いに支えあい、強くなっていくのだなととても考えさせられました。

また、ヒマラヤを越える過程で凍傷を起こしてしまった子どもの写真も展示してあり、衝撃は大きかったです。施設にはクリニックがある他、近くにある大きな病院に通うことも可能だそうです。

5日目

訪問場所

宿泊先である Chonor House から、
チベット子ども村 (Tibetan Children's Village) へ移動



八月二十八日(日) 日直 田原

<感想>

早朝のリングロードは、人々の信仰の深さに触れることができた1場面でした。
チベット文化に溢れる Chonor House に浸れたこともまたいい思い出となりました。

この日はいよいよ TCV へ行くことができた日でした。

TCV では温かく迎えて下さり、丁寧にご説明いただいたことがとても印象に残っています。
また、TCV の中を散策していると楽しそうにサッカーをしている少年たちの姿も見ることができ、ますます皆さんとの交流が楽しみになった日でした。

Letters from Dharamsala

問答教育

問答教育とは、チベット仏教における伝統的学習プログラムの一環で、論理性を身につけるために行うものです。他の生徒と問答することにより、仏典の意味している内容をあらゆる角度からとらえることや、自らの言葉で説明することにより学びを深めることができるのが特徴です。

チベットの僧院における問答教育は驚くほど合理的で高度な議論をするために発展したものです。基本的には回答者と質問者の2組に分かれて問答します。質問者は命題の主題・帰結・論拠を提示し、回答者の答えに応じ様々に命題を組み立てていきます。回答者は質問者が組み立てた命題に対して「その通りである」「何故か」「論拠は成り立たない」「必然関係がない」という4つの答えのいずれかしか言うことを許されません。このルールがあるので問答はスムーズに進行していきます。





例) 質問者「人であれば、必ず無常な存在である。」回答者「その通りである。」質問者「人であれば、必ず無常である、というわけではない。」回答者「何故か。」質問者「人であれば、必ず無常である、というわけではない。なぜならば、人であり、かつ無常ではないものが有るからである。」回答者「論拠は成り立たない。」質問者「人であり、かつ無常では無いことになる。回答者「その通りである。」質問者「人であり、かつ無常ではないものは有ることになる。回答者「何故か。」質問者「人であり、かつ無常ではないものは有ることになる。なぜならば、仏陀はそれであるから。回答者「論拠不立。」…

これは「仏陀は無常な存在ではないが、釈尊は仏陀でもあり、人でもあるので、釈尊は無常な存在になってしまうのではないか」ということについての問答の一部です。質問者は一つ一つの命題の否定形と肯定形を提示しながら、回答者が何を考えているのかを探ります。回答者は自分が認めた主張が覆らないよう慎重に答えなければなりません。質問者は相手の考えを理解し、細かい罣をしかけ、回答者が一度それにかかれば、順次命題を1つずつ戻してゆき、最初の主張を覆さねばならない時点で回答者の負けとなるのです。

こうした問答は何時間も続き、僧院ではこの問答のための「法座」が一日に朝昼晩の三度設けられています。時にはクラス対抗戦のようなものもあり、2、3人の人間が何百人もの質問者を相手にしなくてはならないこともあります。出家した僧侶たちにとって、この問答の時間はスリルに溢れた楽しい時間で、問答で負けなためにその土台となる仏典の暗記学習に励むことになるのです。

6日目

訪問場所

TCV（幼稚園）、ダライ・ラマ法王公邸（ナムギャルゴンパ寺）



八月二十九日（月）日直 田原

〈感想〉

この日は、初めて TCV 授業を見学することができました。なによりも驚いたのは、子どもたちが自分自身で教材を選び学んでいたことです。日本の幼稚園も楽しいですが、日本にはないスタイルに驚きました。

また、この日はダライ・ラマ法王に謁見させていただきました。1 時間以上という予想を遥かに超えたお時間をいただくことができ、その間に 1 つの質問をすることができました。謁見させていただいただけでなく、3 月に起きた大震災に対して、本当に心を寄せて下さっていることが伝わってきました。この日はオフィスでの雨宿りや Chonor House での振り返りなどとても印象的なことの多い 1 日でした。

7日目

訪問場所

ナムギャルゴンパ寺（ダライ・ラマ法王公開講話参加のため）
TCV（高校）

八月三十日（火）日直 榎本



<感想>

アジアの人々を対象に行われた公開講話には、アジア各国からたくさん聴講者が訪れていました。また講話では、昨日の対談の際にお話された“warm heartedness”についても触れていました。講話中、僧侶の方々によってパンとチベット仏教伝統のバター茶が振る舞われたことがとても印象に残りました。普段は静かなお寺も、この時だけはお寺全体が一体となり、にぎわっていたことに驚きました。

Letters from Dharamsala

TCV で出会った言葉たち

The root of education is bitter, but the fruit is sweet.

Success Formula:

Direct your anger towards problems not peoples, focus your energies on solutions.

Winners don't do different things, but they do things differently.

Others before self

Why, except for some special reason, read an inferior book, at the very time you might be reading one of the highest order?

Litter Free,
Worry Free!

Why be unhappy about something if it can be remedied? And what is the use of being unhappy if it

It is the oppressor who needs compassion far more than the oppressed.

(ダライ・ラマ法王) 【ゲストハウス食堂にて】

The important thing is not so much that every child should be taught, as that every child should be given the wish to learn. (不詳) 【教材作り作業場にて】

The mediocre teacher tells. The good teacher explains. The superior teacher demonstrates.

The great teacher inspires. (William Arthur Wand) 【教材作り作業場にて】

8日目

訪問場所

TCV（小学校・中学校）

テンジン先生の教材クラフト工房見学



八月三十一日（水）日直 榎本

〈感想〉

この日の朝は、TCVの中学・高校の朝礼を見学しました。日本の学校では生徒の周囲を先生が囲み、壇上に先生がいる様式が思い浮かびます。しかし、ここでは生徒が主役でした。生徒が生徒にプレゼンテーションをしていたのです。先生は、全員後ろに座って発表を聞いていました。今日はTCVで過ごす最後の日だったので、お世話になった先生方や生徒の方々を招いて感謝の会（フェアウェルパーティー）を開きました。パーティーでは、生徒の皆さんと交流をしながら食事をいただき、1対1でゆっくりお話できました。

9日目

訪問場所

TCV 出発、尼寺訪問

ダラムサラ空港、インディーラー・ガーンティー国際空港

九月一日(木) 日直 下里



〈感想〉

TCV でお世話になった方に別れを告げ、空港に向かいました。その帰路の途中、尼寺に立ち寄りました。尼寺訪問は私にとって初めての体験でした。尼寺についての映像を見せて頂いた後、お寺の中を案内していただきました。本堂を中心にしていくつかの教室があり、女性たちが仏教について学んでいました。本堂にかけられた刺繍がとても美しかったです。

その後国内便を乗り継いでインディーラー・ガーンティー国際空港に到着。ここで最後のふり返しをしました。5時間以上をかけて、ひとりひとりがインドで感じたことを言葉や絵にして発表しました。みんながインドとの別れを惜しみ、涙をながしていました。

10日目

訪問場所

日本に到着！

九月二日（金）日直 下里



<感想>

無事に全員が日本に帰国しました！

この旅でこころがけていたことが一つありました。それは「日本から持ち込んだゴミを現地に置いてこない」ということです。

持ち帰ったゴミを並べてみると、プラスチック製品ばかりだということ、つまり土にかえられないものであふれているということが分かり、衝撃を受けました。持続可能性を考えると、私たちの問題意識は世界規模でおこる大きな問題に向きがちですが、案外自分たちの足元にあるものなのかもしれない、という気付きを得ることができました。

Letters

from Dharamsala

持続可能な未来は、 自分自身が変わることから！ —わたしたちのサステイナブル目標と実践—

私たちはインド訪問に先立ち、本スタディーツアーのテーマの一つである“持続可能性”について、私たちがインド滞在中にできることがないかを考えました。

現地にいながら実践できることほど、効果的なものはないからです。

話し合った結果“日本から持ち込んだゴミは日本に持ち帰る!”ということに決まりました。当然ですが、私たちがインド国内で10日間過ごすことによって多くのゴミが出てしまいます。しかし私たちは日本人であり、日本から持ち込んだものを、ゴミとしてインドに置いてくるのはインドの持続可能性を考えたときに矛盾が生じます。

私たちの周りは様々な持続不可能性なものであふれています。世界の持続不可能性をただ嘆くのではなく、まずは自分の生活の中にある持続不可能性に向き合うことから見えてくることはたくさんあるように思います。

持続可能な未来を実現するためには、自分自身が持続可能な存在でなければなりません。

『持続可能な未来を創る第一歩は、自分自身の変革から』

そんな気持ちが、この目標には込められています。

みなさんは「ゴミ」のことを考えながら、荷造りしたことはありますか？

このような目標設定をしていたため、私たちは一つ一つ考えながら荷造りをしました。また不必要なものを荷物に入れないようにすることで、荷物が軽くなり移動の際に排出される排気ガス削減にも役立つことに気づきました。さらにゴミを日本に持ち帰るということで、小さくしなければなりませんでした。

ゴミを小さくコンパクトにすることで、燃焼範囲の縮小と時間の短縮で二酸化炭素の余計な排出を防げることに気づきました。荷造りをする中で、お菓子などの梱包に「こんなに何重にも包装されているんだ。」と思うことがありました。

掲載写真は、成田空港到着後に撮影した10日間、学生5人分のゴミです。

「ゴミ」を通して世界と自分の生活の結びつきを考えることのできたこの旅は、ライフスタイルのあり方を考えるよいきっかけとなりました。



5. ダライ・ラマ法王との対話の記録

(1) ダライ・ラマ法王

(チベット仏教・密教)

私たちが訪れたインド・ダラムサラでは、チベット仏教のメッカ的な場所として多くの仏教僧が修行をしています。法王公邸近くにある仏教論理大学では、多くのチベット僧たちが問答を通して物事の本質を見極める修行をしています。ダラムサラでチベット仏教僧が修行をするのは、チベット仏教最高指導者であるダライ・ラマ法王がここに公邸を構え修行の場としているからです。法王の祝福を受けるために、世界中からチベット仏教徒が巡礼をしにやってきます。かつてはチベットのラサがその巡礼地でありました。

歴代ダライ・ラマ法王はチベット仏教の最高指導者であるだけでなく政治指導者でもありましたが 2011 年 8 月、チベット人による民主的な選挙で選ばれたロブサン・センゲ氏に全ての政治的権限を付与しました。ダライ・ラマ法王制度は世襲制や選挙によって選ばれるものではなく、「輪廻転生」制度によって先代の没後に選ばれます。歴代のダライ・ラマ法王はチベットの人々を救済するために生まれ変わり続けているとチベット人は信じています。つまり、ダライ・ラマ法王という名前をもった存在が、14 回にわたって輪廻を繰り返してきたということなのです。チベット仏教の教えによれば、すべての生きとし生けるものは輪廻転生すると考えられています。輪廻転生とは、一時的に肉体は滅びても、魂は滅びることなく永遠に在り続けることです。ダライ・ラマ法王は観音菩薩の化身であり、チベットの人々を救済するために生まれ変わり続けると信じられています。

1989 年、現ダライ・ラマ法王はノーベル平和賞を受賞しました。チベットの独立運動に際し非暴力の姿勢を貫く平和的な手段が国際的に高く評価されたからです。

仏教とは・・・

仏教は“仏陀の境地に至ること”をその最高目標としており、悟りや輪廻から解脱することを超え「仏陀の境地 sangs rgyas kyi byang chub」すなわち仏陀たることを目指しています。仏教の目的は、目の前に現れる人々、出来事、事物、私たち自身といったものの実在性に対する私たちの執着を一掃することです。なぜなら、私たちが事物に執着するときから、事物それ自体が私たちに喜びや苦しみをもたらす力を持つと思ってしまうからです。事物の堅固さと普遍性の概念の打破を目指すことで、苦しみの原因となる幻想の中にはまりこむことの無いように、本質を見極めることが仏教の方法なのです。

参考：ダライ・ラマ 14 世『ダライ・ラマの仏教入門』光文社

(2) ダライ・ラマ法王インタビュー

2011年8月29日、ダライ・ラマ法王のパレスの応接間にて1時間15分法王との対話の時間を持つことができませんでした。私たちは一カ月ほどかけてあたためてきた＜問い＞を投げかけ、法王は一つひとつの問いに対して時には真剣に、時にはユーモラスにお答えくださいました。私たちの目の前の法王はまさにその名が示すとおりの「知恵の大海」であり、人類の深い悲しみを引き受けた生き仏でした。以下にその概要を記します。

法王：ようこそ（日本から）いらっしゃいました。まず始めに3月11日にあった東日本大震災で被害にあわれた方のご冥福をお祈りします。同時に日本は現在大切なときを迎えていますね。本日、新しい首相が選ばれると聞きました。首相が5年間で6人交替していて確かに頻繁に変わりすぎかもしれませんが、首相が変わることは民主社会であることの証し（democratic indicator）ですので、裏返すと良い民主制が実践されている社会である印です。

（私たちからの挨拶）

ペマさん¹のご講演後、法王にお会いするのを夢見てきました。3.11後というこの特別な時に法王にお会いできることを嬉しく思います。財政的なそして精神的な支援をしてくださったチベットの方々に感謝します。

法王：チベットの人々は日本のために祈っています。

Q1. ありがとうございます。さて、いくつか質問を用意させていただいたのでお聞きしてもよろしいですか？1992年にブラジルのリオで行われたリオ・サミットの関連会議で講演された際に法王は“普遍的責任”をキーワードに挙げられていましたが、もし来年のリオ・サミット（リオ+20）に再度基調講演者として招かれたら何をキーワードとして挙げますか？

法王：来年私が招かれることはまずないでしょう。ただ、もし招かれるとしたら「全人類がひとつであることに対する精神」(“spirit of oneness of the entire humanity”)を挙げると思います。これは全人類が一つになるための精神性のことです。今の世界はつながっています。1つの製品を見ても中国、アメリカなどの他国のものを使っていたり、1つの考えが他の多くの国に影響していたり・・・そのような局面に遭遇することはみなさんもあるでしょう。もちろん一方で未だ良い局面ばかりを語ってられない地域も未だに存在します。昔の戦争の傷跡も残っています。日本とアメリカ、イギリスとドイツ・・・それぞれ歴史的な確執はあることでしょう。しかし現在ではネガティブな感情を抱え合っているわけではありません。互いに依存しあっている今日の時代において必要なのは確執を乗り越えて spirit of oneness of the entire humanity を心に留めることです。

けれども現実には、oneness の時代であるにも関わらず、グローバルな共通の利益を追求するのではなく、みんな国の利益を追求しています。国の利益が個人の利益を超えてはいけません。国家の利益を追求するのではなく、互いを尊重し合い、世界全体の利益を考えようとする姿勢が大切です。

Q2. 3月11日に東日本大震災が起こりました。不幸を背負った人を、その苦悩を経験していない他者が救うことはできますか。

法王：3月に日本では大変なことが起こってしまいました。しかし、あまり多くを心配しすぎることからは決して物事を好転させません。日本は戦後荒廃した状況から立ちあがり、今では世界有数の先進国になりました。これは称賛に値することでしょう。

伝統は時に不便な言葉です。伝統的様式(old fashion)が新しい様式(new fashion)に変わるのは、それはそれで素晴らしいことである場合があります。そして今回の悲劇にも同じことが言えます。起きてしまったことは起きてしまったこととして現実を見据え、前を向いていくことが大切なのです。

しかし、今回の震災によって苦しむ人、希望を失った人は多くいることでしょう。では、その人たちのために私たちは何ができるのでしょうか。そ

れはその方々の苦悩を分かち合うことです。もちろん同じ経験をしていない私たちにはそれは難しいことではあります。家族を失う、友人を失う・・・このような苦しみを変わってあげることは物理的には不可能なのです。それでもなお 100% 苦悩を分かち合おうとする姿勢で接しなさい。

私自身、若い頃敬愛する家庭教師を亡くした時、深い悲しみの中にいて重たい石が私の肩の上にのしかかっているかのように感じていました。しかし、時が経つにつれて、私は「死者の想いをついでその人の想いと一緒に生きていく」と考えることで前向きになれるようになった瞬間がありました。わたしたちは共同体の一部として苦悩を分かち合うことができると思っています。他者の苦しみを自分の中に想像していくのです。他者の苦しみを 100% 分かちあうことはできないけれど、100% 分かち合おうとする心持ちを持ってはじめて、他者の助けになることができるでしょう。

他者の精神的な支えになるには「信頼関係」というものがが必要です。その時の心のスタンスとして大切なことが、真の協働精神と真の信頼です。そしてその「信頼関係」を築き上げるためにはフレンドシップが必要です。人はオープンになれるような形式ばっていない状況下におかれて初めて心を開こうとするからです。相手と精神的に、心理的に、感情的に、対等であるためには誰に対しても開いた心を持って接することが重要なのです。

これは私が中国政府に対して感じることでもあるのです。中国政府の対応はとても形式的で、真の信頼関係を築き上げることが困難です。日本社会もそういうところがあります。受け継がれてきた慣習が対人関係の邪魔をしています。例えば、日本人には自分の意思を主張しないことをよしとする傾向があるようです。しかし、YES, NO をはっきり言わない限りいくら話しても自身の本音が相手に伝わらず、理解されるのが難しいものです。

この世界は形式的ばりすぎているのかもしれませんが。たとえ貴族であっても、市民であっても、人生において本当に大切なイベントは全ての人間に平等に 2 つしかありません。それは生と死です。どちらも形式ばったものではありません。みなさんの生まれた瞬間を思い出して下さい。たしかに、生まれたときにお祝い事をしますが、まさに生まれた瞬間には形式ばった儀式はないはずです。ところが生と死の間には形式的なイベントが多すぎます。感情、肉体、精神はどの人間も共通して持っているものであり、

私たちは皆、平等です。他者と同じ目線に立ち、いつでも、誰に対しても、開けた心で接する心持が必要なのです。

Q3. もしも法王様が校長先生になられたらどんな教育をしますか。

法王：私は近代的な学校教育を受けていないので分かりません。私だったら鞭を持って勉強させるかもしれません。私が小さいときは鞭を持った先生の前で勉強をしていました。それが怖くて、私は一生懸命勉強したのです。鞭は効果的です（笑）

ここまでは冗談ですが。教育について少し私の考えを述べましょう。知識の学び得る過程には3つの段階があります。最初のレベルは知識のコピーです。これは一般的に私たちが先生、そして教科書から得るものです。これはただの原本のコピーです。次のレベルは知識の探求です。習った知識を自分の中に落とし込み、あなた自身で探求していきます。そして最終的なレベルは知識を更に深めるために行う鍛錬、メンタル面の努力です。この段階においては、自分の経験を引き出してきて考えたり、学問同士の相関関係を考えたりします。これまでの知識のレベルをもとにして自分自身で研鑽をつみ、こなれてくるまで精神的に鍛錬をつむのです。この段階まで踏み込むことにより、知識は100%確実なものとなり、結果として無意識に高度なことができるようになります。これらはすべての勉学に当てはまります。

また、人間の教育には論法（reasoning）が必要です。チベットの教育ではその力をつけるために矛盾に気づかせる教育をしています。その例としては問答を用いた教育手法が挙げられます。この教育は伝統的であると同時に現代的で、かつ先進的な教育であると言えるでしょう。

次に教育の真の目的について考えましょう。教育の本当の目的とは本物と見かけ上のもののギャップ（gap between appearance and reality）を減らしていくことです。そのギャップをゼロにするのは不可能ですが、教育を通して reality を客観的に見つめる力を身につけることはできます。それを習得しなければ、望ましくない感情が入ってきてしまいます。感情介入がおこると物事を客観的に見極めることが非常に難しくなります。

一般的に私たちが他者に対して持つ 90%のネガティブな感情は自分の持つ否定的な感情の投影であると言われるほどです。このことはアメリカの大学の研究によって明らかにされています。Reality を否定的に捉えるときには、そのほとんどが reality 自体ではなく自分の見方や心のありかたに問題があるものです。しかし多くの人にはそれに気づかず、reality ばかりを責めます。そのため、人間の持つ心をより中立的に、より穏やかにすることが必要とされているのです。

しかし今の教育だけでは内なる平和はもたらされません。現に現代の人々は物質的な幸せを追求する傾向にあります。他者に対する感情をコントロールするためにはいくつかの段階があります。まず、友情があり、つぎに信頼があり、そして心が開かれ、最後に自分自身の心の制御へとつながります。この段階を経ることで人間の偽善はなくなります。

今の教育に欠けているものは心の優しさ(warm-heartedness)です。欠けている一方で、多くのひとがその大切さに気づいています。普遍的な倫理をいかに教育に組み込んでいくかが鍵となっています。その倫理は地球上すべての人に尊敬されるものである必要があるため、非宗教的であることが重要です。

Warm-heartedness を重視することによって心に平和が訪れます。そして平和の訪れた健康な心は身体にまで良い影響を及ぼし、生のよき良いサイクルが生まれるでしょう。

Q4. 私はボランティアという言葉が表面的に聞こえてしまって好きではありません。本当のボランティアとは何ですか？

法王：「誠実さ」(sincerity) をもったボランティアのことでしょう。「誠実さ」は自ずと他者の幸福につながっていくものです。人は名声にこだわり、名声を得ることで満足してしまう傾向にあります。一方で鳥を始めとする動物たちは名声が何かを知りません。ゆえに親鳥はひなたちを育てるのに必死で、どんな自己犠牲も厭いません。これが真のボランティアなのです。報酬を求めずに自分の人生を犠牲にする覚悟を持って他者のために尽くす、真のボランティアとはそういうものなのです。

Q5. ユネスコの挙げているテーマとして国際理解があります。しかし、現状として自分がいくら理解しようとしても他者から対話を拒まれることがあります。例えば、9.11のテロリストに相互理解を求めようとしても難しく、逆に危害を加えられる事態になりかねません。国際理解や他者理解は果たして可能なのでしょうか。

法王：たしかにそのような人に相互理解を求めるのはとても難しいことですが、他者に傾聴することは大切です。ビンラディンがあなたの目の前にいたとしましょう。私たちが彼を本当に理解しようとするのであればなぜあのような惨事を起こしたのか、全身全霊をもって傾聴しなければなりません。もし、その努力を払ったとしても銃を向けられたとしたら、瞬時に立ち去りなさい。

20世紀は「流血の世紀」と言われていました。21世紀は「対話の世紀」に変わらなければなりません。

世界にはまだまだ解決すべき問題が数多くあります。中国にもこの問題を見出すことが出来ます。日本の尖閣諸島、そしてインドとの国境線問題に代表されますが、いずれも武器の存在をちらつかせ、現在もなお緊張状態に置かれています。しかし、もう武器を持つ時代は終わったのです。

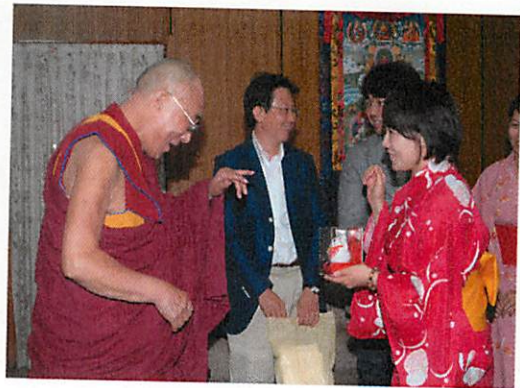
Q6. 最近、「持続可能性」という言葉が流行っていますが、それについて法王様はどうお考えですか。

法王：その通りです。持続可能性という言葉がはやっていますよね。これが注目されている背景には、アジアなど多くの国々が西洋に追いつけ追い越せ、と環境に負荷をかけた政策を推し進めてきたことが指摘されてよいでしょう。結果として多くの環境破壊が問題となっているだけでなく、経済格差もますます大きくなってきています。

これからの世界はアジアの急激に増加している人口抜きに考えることはできません。しかしどれほどの人が、アジア諸国の人々が車を1家に1台持つようになったらどうなるか、考えたことがあるのでしょうか。アジアは多くの人口を抱えているのにも関わらず、それを考慮に入れずに発展を

迫及しています。これはこれからの地球の持続可能性を考える上で大きな課題となっているのです。

i ジェツェン・ペマさん。法王の妹で、TCVの元総長。ユネスコメダル受賞者。2010年に聖心女子大学で教育と社会の在り方について「明日への対話」と題された講演会を行った。



6. チベット子ども村 (Tibetan Children's Villages)

(1) 概要と暮らしの様子

今回、私たちが訪れた TCV とはチベットからヒマラヤを越え、学びにきたチベットの子どもたちが学んでいるチベット人による、チベット人のための学校です。
今回、滞在したのはダラムサラにある 2 校のうちの 1 校「Upper Dharamsala 校」です。

TCV の概要 ～Upper Dharamsala 校～

ダラムサラには、街の上部に位置する「Upper Dharamsala 校」と、街の下部に位置する「Lower Dharamsala」校があります。

- ・ “Others before self” が学校の教育理念
- ・ 生徒数：1915 名（内 1770 名は寄宿生）
- ・ 学校の構成
- ・ スタッフ数：255 名（内教師は 236 名）

幼稚園	3～5 才
初等クラス	6～10 才
中等クラス	11～13 才
高等クラス/職業訓練クラス	14～17 才



TCV でも中心となる TCV 本校

ジェツン・ペマ女史が託児所を拡張し、村のような形態から”Tibetan Children’s Village”が 1960 年、ネルー首相の協力のもとでムスリーに最初の学校が設立されました。（生徒数は 50 人）現在、インド・ネパール・ブータンにあるチベット人学校は 87 校（生徒数は 28000 人）うち、TCV は 15 校。それまでは、子どもたちは 8 歳になると託児所から出て、インド政府の学校に行かなくてははいけませんでした。しかし、寄宿施設のある学校がいっぱいになってしまったためジェツン・ペマ女史が拡張。Upper Dharamsala の生徒数が増えたことで、Lower Dharamsala にも TCV が設立されました。

暮らし

TCV の生徒の皆さんの
1 日は朝の祈りから始まります。
縦割りで共同生活を送り、
高学年になると男女別の共同生活となります。



<TCV 生徒 1 日の流れ>

- 5:00 起床
- 6:00 朝食
- 7:00～7:30 全校生徒でお祈り
- 7:30～8:30 朝の自習
- 8:30～8:45 朝礼
- 9:00～ 一時間目（昼食まで 45 分×4 時限）
- 昼食後～16:00 2 クラス
- 16:00～17:30 休憩

(2) 授業風景

子どもたちが通う TCV 幼稚園、小学校、中学校、高校の授業を見学させていただきました。独自の教育方針を実践するなかで、子どもたちと先生方が真剣に向き合い、切磋琢磨する様子をうかがうことができました。子どもたちの主体性を重んじながら、ダライ・ラマ法王の想いのもとで実践される教育。その様子を紹介します。

幼稚園

モンテッソーリ教育を軸に、子どもたちが自分1人1人の緑の座布団と自分の机の空間を大切にしながらその日1日を過ごせるように教育が行われていました。数字で遊ぶ子、文字の練習をする子、先生と一緒に本を読む子…それぞれが“今”を大切にしながら時を過ごしていました。

※モンテッソーリ教育：知的障害を持つ子どもの言語習得、感覚訓練の実践を健常児にも適用した教育方法です。



小学校

先生の問いかけに全力で考え答える子どもたち。理科・英語・算数の授業を見学させていただきながら、廊下から聞こえる“線路は続くよ…”の歌が印象的でした。教科書や教材を使用しながら基本的にはチベット語で授業を行い、英語で意味を考えながら教科の理解を図っていました。



—語学の授業—

1～3年：すべてチベット語で授業を行っています。

4～6年：英語の授業以外はすべてチベット語で授業を行っています。

—教科書—

1～5年：チベット文化省が発行している教科書を使用しています。



中学校

学年を超えて、僧侶が行うチベット独自の教育である問答教育を導入していました。



1人がお題を出し、それに対してもう1人が答える、普遍的な問いを交わし合う問答教育。ある子は「うさぎは動物であるが、なぜ植物ではないのか」という問いに対して全身からパワーを発しながら自分の答えを相手にぶつけていました。子どもたち自身もディベートをすることを楽しい、自分の考えを相手と共鳴させることでの喜びが得られる、と語っていたのが印象的でした。

高校

自分の進路に見合ったクラスで専門的な教育を受けることのできる高校生たちは、自分の好きなことを勉強しているからこそ、授業中も質問や意見が絶えず、積極的に授業を楽しんでいる姿が印象的でした。

理科・英語・音楽・美術を見学させていただき、高校生ならではの豊かな発想を刺激する授業が展開されていました。主な授業中の言語は英語で、内容もチベットの文化を大切に伝えながらも、世界を意識したグローバルなものでした。



—語学の授業—

6～12年：すべて英語での授業を行っています。

Option：チベット語、ヒンドゥー語、日、中、独、仏の授業を受けることができます。

—教科書—

6～12年：インド政府発行の教科書を使用しています。



(3) お会いした先生方

—校長先生とテンジン先生のクラフト工房—

TCV が TCV であるために、先生たちの存在は欠かせません。私たちはたくさんの素晴らしい先生に出会い、お話を伺いました。どの先生からも、子どもたちへの深い愛情と教師として働けることへの喜びを感じました。中でも特に印象的な出合いをさせていただきました、TCV 総長 Tsawang Yeshi 先生とテンジン先生を紹介します。

Tsawang Yeshi 先生

TCV 全体をとりまとめる総長。前任はダライ・ラマ法王の妹さんであるペマ先生。一度出会ったら忘れることの出来ない、大変素敵な笑顔で語りかけて下さいました。

学生：教育にとって大切なことはなんだと思いますか？

先生：私たちは、ダライ・ラマ法王の言葉や思想をととても大切にしていますし、私自身も深く共感と尊敬をしています。それは例えば、他者へのまなざしをもつということです。

学生：学校に入った時、壁に掛れた“Other before self”の言葉がとても印象的でした。

先生：教育は他者へのまなざしを持つための手段です。私自身のためのものでもなければ、もちろん私自身の名誉のためでもありません。

学生：どんなことを心掛けていますか？

先生：法王様は、3つのRの大切さを言っています。R:respect for others, R:responsibility, R:respect for self です。生徒たちに「これを大切にしましょう」と言っても伝わりません。まず、先生たちがその手本を見せることが大切です。頭と心と体のバランスを持てるようにするのも、教育の目的です。

学生：TCVの生徒たちはとてもエネルギッシュですね。それはなぜですか？

先生：それは、子どもたちが元気でいなければいけない状況だからです。彼らが背負っているものを考えるとき、教師たちは彼らに元気を与える存在でなければいけません。エネルギッシュであることで、子ども達自身で自分を励ましているのです。

Tenzin 先生

総長先生が「ぜひみなさんに会わせたい」と紹介して下さったテンジン先生。学校で出る牛乳パックなどをリサイクルして英語の教材をつくっています。目を輝かせながらお話をしてくださる姿にみんな心を惹きつけられました。

先生がなさるクラフト工房にもおじゃまさせていただき、実際に教材が出来上がる様子を見学させていただきました。

学生：どうして牛乳パックで教材をつくろうと思ったのですか？

先生：とってもたくさんの牛乳パックがゴミとして捨てられるのを見て、なにか出来ないかなと思ったのです。法王様が環境問題の深刻さを話されているのに、私たちがこれではいけない、と思いました。

学生：どうして先生になろうと思ったのですか？

先生：私もこの TCV の卒業生なのです。いま隣に座っている校長先生の教え子です。先生と出会い、私も教師になりたいと強く思いました。TCV で働くことが出来てとても幸せです。



学生：先生は授業でどのように道徳を教えていますか？

先生：“トングレン”という仏教の瞑想法を授業に取り入れています。子どもたちの心の中に慈悲の心を育てるのです。子どもたちに、「山でロバが倒れていたらどうする？」と質問をして考えることも大切にしています。実際には助けられないけど苦しんでいる人を具体的に想うことで、その気持ちを考える訓練です。

学生：教育にとって大切なことはなんですか？

先生：他者を支配することではなく、自分の気持ちを支配しうかにコントロールするかを教えることだと思います。



(4) 感謝の会 (フェアウェルパーティー)

TCV で過ごす最後の夜、私たちは感謝の気持ちを伝えるため TCV の先生方や生徒の代表の方をお招きし感謝の会を開きました。私たちが 10 日間で何を学び、何を日本にもち帰るのかを訪問した場所ごとをテーマに発表しました。歌は、「世界に一つだけの花」を英語の歌詞で披露しました。お礼の気持ちを込めて渡したプレゼントは、手作りの絵はがき、招きねこ、食べ物や乗り物の形をした消しゴムなどを送りました。日本のデザートを食べ、白玉をきな粉、あずき、黒糖、ココナッツミルクで召し上がっていただきました。その後は、TCV の先生方、代表として参加して下さった生徒の皆さんとお食事をしながらお話などをして交流を深めました。

プログラム

1. はじめの言葉 (永田 佳之先生)

2. 水島 尚樹先生よりお言葉

3. 「日本人は何を学んだのか」

 ガーンディーからのメッセージ

 ダライ・ラマ法王からのメッセージ

 チベット難民受け入れセンターからのメッセージ

 TCV からのメッセージ

 私たちからのメッセージ

発表者 榎本 慈子

発表者 堀江 麗

発表者 田原 茉莉

発表者 山崎 玉美

発表者 下里 祐美子

4. 歌「世界に一つだけの花」 SMAP

5. プレゼント贈呈

6. 日本のデザート

7. 会食

8. おわりの言葉 (永田 佳之先生)



(5) 歌

私たちが曲の選曲をしているときに、他の候補として“小さな世界”や“翼をください”などがあがりました。“世界に一つだけの花”にした理由は、国が違くとも、育ちが違くとも、“今”を生きている人たち、一人ひとりに意味があるというメッセージを伝えたかったからです。当日は、歌を大変気に入っていただくことができ、歌詞カードと音源を是非置いていって欲しいと言っていただくことができました。

One of a kind

Look at the flowers that stand in the shop.
Each has a beauty that makes your heart stop.
We all have our favorites, but one thing is sure.
Flowers will bloom with a beauty that's pure.

Which one among us is better than the rest?
No competition, no need to contest.
There in the buckets, the flowers stand tall.
Heads held in pride far above it all. しゃんと

Yet why do we people do what we do?
Always wanting to compare?
Fighting each other to get to the top,
When we all have a treasure so rare.

Why don't we get it?
In this wide world you are one of a kind.
Cherish your beauty, there's no need to hide it.
Each of us holding a different seed.
Just be yourself, that is all you need.

Small flowers, big flowers, all kind of flowers.
You'll never find any one that's the same.
No need to struggle to be Number 1.
Just be yourself, be the Only One.

世界に一つだけの花

花屋の店先に並んだ
いろんな花を見ていた
ひとそれぞれ好みはあるけど
どれもみんなきれいだね

この中で誰が一番だなんて
争うこともしないで
バケツの中誇らしげに
胸を張っている

それなのに僕ら人間は
どうしてこうも比べたがる？
一人一人違うのにその中で
一番になりたがる？

そうさ 僕らは
世界に一つだけの花
一人一人違う種を持つ
その花を咲かせることだけに
一所懸命になればいい

小さい花や大きな花
一つとして同じものはないから
No.1 にならなくてもいい
もともと特別な Only One

(6) インドの旅で私たちが感じたこと、 考えたこと

TCV 最終日のフェアウェルパーティーで、私たちは一人一人がインドでの学びを TCV の先生や生徒たちの前で発表しました。

榎本慈子 MY LIFE IS MY MESSAGE

(原文)

I'm going to talk about Mahatma Gandhi. We visited the Raj Ghat and the Mahatma Gandhi Memorial Museum in Delhi. There are so many pictures about the March of salt and messages. Many kind of pictures and things are impressed for me. For example, people and people who need to help even if he lose weight. I found that he lives for others. I have learned what the meaning of lives for others.

Unfortunately, he died before achieve his dream. However, today, Gandhi was respected by all over the world. He has left important message for us which is My life is my message. That was so impressive. I would like to live which impress at least one person who remembers my life and my message.

(日本語訳)

私はガンディーについてお話したいと思います。私たちはデリーにあるラージ・ガードとガンディー記念館を訪れました。そこには、塩の行進のようすを撮影した、たくさんの写真やメッセージがありました。私はそれらにとっても感銘を受けました。例えば、繰り返す断食によって痩せ細ったガンディーが、助けを求めている人々にやさしく手を差し伸べている姿の写真です。彼は“ひと”のために生きていたこと、“ひと”のために生きるということの意味について気づくことができました。

彼は彼の目標を成し遂げることなく亡くなりました。しかしながら今日、ガンディーは世界中の人々から尊敬されています。彼は私たちに“My life is my message.”という大切な言葉を残しています。とてもインパクトのある言葉です。私も、自分がこの世を去ったあと、私が生きていたことを記憶してくれる人が一人でもいてくれるような、人生を送りたいと思います。

田原茉莉 HOPE

(原文)

We went to the Reception center. The director of center talked to us about details and history of the center. Through his talking, I learned the importance of non stressful environment. The director said Tibetan people released from frustration when Tibetan people arrived at the reception center, and when I saw a room of reception center, I felt very sad, but I thought non-stressful environment of the reception center give hope for people. Japan has not received enough refugees and it does not have enough places to accept. The number of refugees whom the Japan government accepts per year is almost 50 people. Most of the refugees are from Myanmar. It is said some reasons why few number of acceptance, but I thought we should establish more places to accept people with hospitality.

Finally, the director of reception center said that they would continue their efforts until number of the refugees get down to zero.

Through that, I thought we need to look at this issue with wider view points and Japan should increase its capacity to accept more people in difficulty.

Tomorrow, I'll go back to Japan, I take part in supporting refugees club in our University. I'm sure the first step what can I do is take care with hospitality for refugees in Japan.

(日本語訳)

私たちはレセプションセンターに行きました。そこでは、センター長から概要と歴史を詳しくお話いただき、ストレスのない環境がいかに大切か学ばされました。特にチベットからカトマンズ、デリー、そしてレセプションセンターに来た時に彼らの心理的フラストレーションが少なくなると聞いたのがとても印象的でした。レセプションセンターでは女性のお部屋に入らせていただいたのですが、小さい子のベッドを見るととても悲しい気持ちになりました。しかし、私はこのレセプションセンターでストレスを感じないことが彼ら・彼女らの未来につながっているように思えました。

現在、日本は十分な難民の受け入れ枠と場所を確保していません。日本政府が年間に認定している難民の数は大体 50 人です。また、難民認定を受けるほとんどの難民はミャンマーから来た方々です。これには、色々な理由が言われていますが、私はもっと受け入れる

場所を設け、難民の方々をホスピタリティーの精神で受け入れた方が良いと思います。

最後に、レセプションセンターのセンター長がチベット難民の数が 0 人になるまで続けるとおっしゃっていました。私はこのことを通して、私たちは物事をより広い視点で見なければいけないことと、日本は困難な状況にいる方々を受け入れるキャパシティを広げるべきだと思いました。

明日、私たちは日本へ帰ります。私は大学で難民を支援する団体に入っています。私は第一のステップとしてできることは、日本にいる難民の方々にホスピタリティーの精神でケアを行うことではないかと確信しています。

堀江麗 COMPASSION

(原文)

I'd like to tell you about his facial expressions, and his words. "Sad, very sad." His Holiness the Dalai lama said these words when he saw the pictures of disaster stricken area hit by the great earthquake in March 11 in Japan. We can't forget his figure especially his faced expressions. He was really thinking of suffering people in deep sorrow. At that moment, there were no gaps between His Holiness and people in Tohoku area in Japan. From the bottom of heart, he mourns for them. This is the way he lives with people whether they are nearly or far away. This is the way of thinking or philosophy foundation. We learned a lot not only from his words, but also from his expressions.

Second, I'd like to tell you one of the words that caught my heart. "Genuine trust" is one of most impressive words for me. These are many problems, issues in the world. Some of them even trigger war. All of these problems come from the lack of "genuine trust". I learned this when I met His Holiness in our private audience. When we think of "genuine trust", we have to be honest. To be honest, we have to be self-confidence. To be self-confidence, we have to be transparent. To be transparent, we have to be friendly. This is the way one will gain genuine trust, he said. What he stressed in his talk was all deep and thorough and was surely inter-connected at deep level. There were many many things to learn. What I can do now is to talk with people frankly, honesty, with open hearted mind. With this practice, there will be no misunderstanding, these will be

no suspicion any more. When people all around the world live such a honest life, world peace may be restored. This is what we have learned from His Holiness, a person of compassion.

(日本語訳)

私からは法王にいただいた慈悲にあふれたお言葉についてお話させていただきたく思います。

「辛い。とても辛い。」ダライ・ラマ法王は3.11の大地震で被害が及んだ地域を見たときにそう言われました。私はその時の法王の表情を忘れることができません。彼は被災者の方々と同じ体験をしたかのように額にしわを寄せ、思いをはせられていました。心の底から彼らの事をいたわっておられる法王と被災者の方々との間に、その時距離はありませんでした。言葉からだけでなく、地理的にはどんなに遠くとも寄り添おうとなさる、一番近くにいて下さるその姿勢、そして表情からも私たちは多くを学びました。

また、一つ一つのお話すべてが深く、かつ私たちが大事にしなければならない普遍的な教訓を語られていました。お話の中で最も印象に残った言葉の一つに「真の信頼」という言葉があります。この世の中には様々な問題が点在しています。中には戦争までを引き起こすものすらあります。これらの問題は対話によって得られる「真の信頼」の欠如ゆえに生まれてしまったものなのです。「真の信頼」を得るための対話には何が必要なのでしょう。私は自分の中で渦巻いていたこの疑問への答えを今回の謁見でいただきました。

「真の信頼」を得るためには私たちは誠実でなければなりません。誠実であるためには自尊心を持っていなければなりません。そして自尊心を持つためには率直でなければなりません。率直であるためには友好的でなければなりません。これが「真の信頼」を得るために経る道のりです、彼はそう言いました。彼のお話は全て奥行きがあり、そしてとても深いどこかでつながっていました。何よりも感激したのは、その教訓を法王自体が実践されていることです。法王からは本当にたくさんのことを考えさせられ、そして学ばせていただきました。法王とお話しさせていただいたからにはお話の中で得た学びを実践するほかに道はありません。実践することにより、見かけ上のものが意味をなさなくなり、誤解、そして疑いはなくなっていくでしょう。世界中の人々がごまかしのなく、自他に対して誠実な人生を送るようになったときに世界平和は訪れるのかも知れません。

山崎玉美 ENERGY

(原文)

What I have learned, the importance of teachers expression of what his want to communicate with whole is spirit. For three days, I spent here. I had the important message from you is powerful and "Energy". For example, some teachers when teaching to student, they used big body language and a lot of facial reaction in front of student. They are hurtful energetic voices give student a power. Rhythmical teaching provide student with filled full time for all the student. What I have learned next education with emphasis on environment. Handcraft teaching materials made by milk paper boxes was a surprised to me and there is one more thing. I heard from a teacher "When Ms Tenzin teaches compassion, she tells story about donkey with heavy baggage. I thought that this share message His Holiness. "

(日本語訳)

今回学び得たことについてお話させていただきます。それは、教師の表情が生徒たちとの対話において非常に重要であり、それこそが魂となっているということです。三日間を私はここで過ごさせていただきました。私は先生方から力強さと"エネルギー"というとても大切なメッセージをいただいたのです。たとえばある先生は生徒に教えるとき、生徒に対して大きな身振り手振りをつけたりや豊かな表情を使って授業をしていました。先生方の心温まる想いが込められた声が生徒たちを元気づけているのだと感じました。心地よい教育は、すべての生徒たちにとって充実したときを享受しているのではないのでしょうか。また、環境に重点を置いている教育に関しても学ばせていただきました。牛乳の紙パックによって作られた手作りの教材は、私にとって大きな感動でした、そしてもう一つ感動したことがあります。ある先生から伺ったことなのですが、テンジン先生は子どもたちに思いやりを伝えるときに、重い荷物を背負ったロバについて考える物語を生徒と一緒に共有するのだそうです。ダライ・ラマ法王の想いと共通しているこの精神に感銘を受けました。

下里祐美子 Others before self

(原文)

Through these 10 days in India, we have met 5 keywords for our lives. When I stepped

into TCV at first, a word that "Others before self" was impressed in my memory. The word of "Others before self" seems to have established not only teachers but also student. 11th March, Japan got a huge earthquake. After the earthquake, Tsunami, nuclear plant disaster, so many young people in Japan have been feeling powerless when they think of people who lost family, friends, houses, but through the experiences we had here, I found that a teachers shall bring a sense of hope to everyone no matter what the situation is. Under any circumstances, we don't won't to stop smiling, not losing freedom of mind, and I want to face any difficulties courageously.

For teachers and student, we are deeply grateful to your kindness.

(日本語訳)

インドでの 10 日間を通して、私たちは 5 つのキーワードに出会いました。それは、「MY LIFE IS MY MESSAGE」「HOPE」「COMPASSION」「ENERGY」そして「OTHERS BEFORE SELF」です。TCV に初めて足を踏み入れた時、壁に書かれた「Others before self」の言葉がとても印象的でした。この言葉は決して表面的なものではなく、先生や生徒たちの間に伝わっていることを知りました。

3 月 11 日、日本を大地震が襲いました。地震、津波、そして原発事故がおこり、多くの人々が家族や友達や家を失いました。私たちを含む多くの若者が彼らのことを考えるとき、自分たちの無力さを感じずにはられません。

TCV で過ごす日々の中で、どのような状況でも周囲の人々に希望を見せる存在としての教師の姿を見ました。これからどのような状況になろうとも笑顔を忘れず、心の自由を失わず、多くの困難に力強く向き合っていきたいと強く思います。

先生方、生徒のみなさんに心からの感謝を申し上げます。

7. 感想文

水島 尚喜

「TCV の美術教育環境について」

堀江 麗

「希望のメッセージ」

山崎 玉美

「“運命とは” —インド、ダラムサラが導く果てに—」

田原 茉莉

「浄化の旅」

榎本 慈子

「心」

下里 祐美子

「難民がつなぐ希望への道」

TCV の美術教育環境について

教育学科教員 水島 尚喜

日本では、個々の“創造性の育成”が大きな交換価値として、美術教育が運営されている。3・11以降、国内においては、贈与的価値の文脈における“アート为社会貢献”が論議されるようになった。今回の TCV 訪問では、今後の美術教育の果たすべき役割を考えるよい機会を戴いた。以下に短い印象批評ではあるが、TCV の美術教育をめぐる環境についてレポートする。

幼児の段階においては、モンテッソーリ教育を採用し、“感覚教育”に重点をおいている。世界認識の土台が形成される幼児期に、五感を通して世界の理や豊穡性を直観することが重要視されている。幼児でありながら、活動する子どもの眼差しが大変真剣であることに感動した。



黙々と真剣に積み木による構成に取り組む



幼稚園内の掲示物。数、色彩、形態などの要素が
ダライラマ法王の慈愛の元に調和的に示されている

初等・中等教育における美術指導は、2011 年度より美術教師として赴任したタシ先生

(Mr. Tsering Tashi) によって行なわれていた。タシ先生は、伝統的なタンカ（仏画）師として活躍されていた方で、TCV で刊行している教科書の図版製作にも関わっている。タシ先生の造形指導は、伝統的な臨画による方法に基づいている。児童・生徒は、個々の興味・関心に基づいて絵画題材が自由に選択できる。多くの児童・生徒は、タシ先生が作成したお手本をもとに描いていた。常に子どもたちに寄り添って、手ほどきしているタシ先生の姿が印象的であった。



美術教室風景（小学校、中学校共用）



全員分のスケッチブック



タシ先生自作のお手本（仏具）



一人一人丹念に手ほどきするタシ先生

日本の教科目標としての“創造性の育成”には個人重視の側面が強いが、TCV においては臨画的手法によって、個々の個性とチベット文化を核にした世界観の伝達が両立している。歴史的な正当性を実感した。

TCV 内にあるダライラマ寺院では、卒業生がタンカ職人として寺院内の装飾に従事している。



先生よりチベット文字のレイアウトを学ぶ



寺院入り口への装飾の彩色

TCV 構内には、様々な仏教の教えを象徴する造形物や設備が設置されている。物質的には決して十全ではないが、仏教的世界観を根底に、大切な人間の“生”の形象化が保障されている。



大きな石にペイントされた鸞



砂場で遊ぶ。この時期の子どもにとって、世界共通の造形言語。

希望のメッセージ

堀江 麗

ダライ・ラマ 14 世とお話をさせていただいて心に残った一節がある。“You have rebuilt from ashes. Forget tragedy and look forward.” このメッセージは震災後の日本に向けて下さったものである。私はその一節をチベット亡命政府という体现された事例に触れながらさらなる重みをもって受け取った。“民族の浄化”という危機に瀕していながらも、人々が慈悲の心と何があってもくじけない心の強靱さを持ち合わせてそのメッセージを実践している奇跡の世界がそこにはあった。

「未来のチベットは僕たちにかかっている。だからもっと勉強して、将来チベットの役に立ちたいんだ。」まだ幼い頃に祖国を追われて亡命してきた高校生が流暢な英語で私に向かってそう言った。その時の自分の気持ちを思い出すとあつけにとられた、という表現が一番ふさわしいと言えるだろう。あとから襲ってくるその高校生への畏敬の念と自分の未熟さへの焦燥感、そして虚無感にただただすごいね、と言うことしかできなかった。

国を失う。日本で毎日何の不自由もなく暮らしている私には想像がつかないものである。これから経験することもないであろう。チベットという“国”は 1951 年に中国に占領されて以来、現在もなお支配下におかれている。経済発展のため、と名目上の支援を受けているその“国”では文化的、宗教的な財産はほとんど破壊され、中国による乱開発が進められている。学校では中国語が強要され、ギャンブルや喫煙、売春が子どもたちの間でも蔓延している。そんな状況を打破してしっかりとした教育を受けさせるため、命がけの旅であることを分かっているながらも親たちは自分の子どもをダライ・ラマ 14 世の樹立した亡命政府のもとに送り込んでいる。教育は彼らにとって自分たちのアイデンティティを継承し、希望を次の世代に繋ぐ唯一の方法なのだ。だからこそ教育の現場に託されたものは大きい。

私たちが訪れた TCV (Tibetan Children's Villages) は幼、小、中、高一貫の全寮制の学校で、16,000 人にものぼる生徒一人一人にきめ細かな対応がされていた。生徒たちは“マザー”と呼ばれる寮母を本物の親であるかのように慕い、先生との間には揺るぎない信頼関係が生まれていた。その様子は授業を見れば一目瞭然である。教科書に頼らない独自の教え方に沿って進んでいく授業に、生徒たちはキラキラとした目でのぞんでいた。中でも最も印象に残っているのは問答という授業である。ディベートのような形式がとられるこの授業では相手の考えを論破することが求められるため、生徒たちにとっては今まで学んできたことを実践の形で発揮し、身に付ける良い機会となっていた。過熱する論争に的確なアドバイスを送る先生と主体的に授業を作り上げていく生徒たち…両者が一心同体に

学ぶ現場に“希望の営み”である学校教育のあるべき姿を見た。そして、この活力あふれる教育現場こそがまさに法王のメッセージが体现されている世界なのであった。



日本に戻ってきて、久しぶりに震災関連のニュースを見た。同時に今夏ボランティアで被災地に行った際に未だ多くの瓦礫が残っているという現状を目の当たりにし、気が遠くなりそうになった事を思い出した。たしかに日本にいる以上国を失う、という経験をする事はこれからもないかもしれない。しかし私たちは今、数多くの人命と街をなくす、という現実直面している。“Forget tragedy and look forward.” 今度は私たちが前を向き、立ち上がる番だ。大学生の私にできること、それは自分にできる復興支援を一つずつ実践していくことであるように思う。絶望の中に希望を見出し、前を向いて進み続けるチベットの人々から受け取ったメッセージを胸に。

“運命”とは

—インド、ダラムサラが導く想いの果てに—

山崎 玉美

“運命”とはなにか。“宿命”とはなにか。

人生を歩む過程のなかで、社会と他者とどう関わりながら生きていこうか。そんなことを考えながら今日を今を、見えない何かに怯えながら必死に生き急いでいる自分がいました。

東日本大震災。この未知の脅威との出会いが与えた影響は大きかったのかもしれませんが。そんななかで触れたインド。ダラムサラの地で感じた空気感や想いは、今の自分を見つめなおす上での重要なターニングポイントとなったと感じています。

綺麗な草花と複雑なゴミたちが混在した町、デリー。煌びやかな少女と灰色に包まれた道端に佇む女性。同じ町、同じ時間が流れているとは思えず、もしかしたら彼女たちはその役を演じているのではないだろうか。そう思わせるほど、人々の光景が自然すぎていました。生まれたときから背負っているカースト制。本人たちは“運命”と捉えているのか。またはその“運命”をも超えるものが、この地には存在するのか。だから彼らを生という死の修行にこれほどまでにポジティブに向かわせているのだろうか。インドの地を踏みしめてから3日、自分とインドとの対話がここ、デリーから始まったような気がしています。

宗教国家としてのインド。イスラム教には統一神がいないといい、ガネーシャなどは信じる神のひとつのキャラクターなのだと伺いました。ともすると、彼らが信じる者は神なのか、それとも自らの生に映る己の姿なのか。宗教が生きる上で人々の支えとなるように、自分にとっての支えとはなんなのであろうかと自問自答する想いでした。

天空の地、チベット。ダライ・ラマ法王に常に見守られている地に生きるチベットの人達たちのメッセージは天地に満ちていました。チベットから訪れる人々は法王様に会うために、チベットの国家を守るために、自分の生きる道をインドに託して亡命してきます。

インドに触れて感じたこと。それは“生きる意味の見出し方は人それぞれである”ということです。幸せとはなにか。家族とはなにか。その根本を見つめなおす良い時間でした。幸せはこうである、と一概に括することはできません。物乞いの方も一職業としてそれを担っているのかもしれませんが。生きていくために職に就いてお金を稼ぐのと同様、物乞いも職業の一種なのかもしれません。そう考えると、物乞いの方にお金を渡すかどうかはビジ

ネスと考えればフェアなのではないでしょうか。相手の状況に納得できればお金を渡す。お金でなくてもお菓子でもいいかもしれない。物乞いの少女と向き合った時間は同じ地球に生きる者として、たまたま出会った奇跡と話しかけてくれた偶然に感謝した瞬間でした。

教育は人を救う。教育は人を支える。生まれてから死ぬまで学びの人生で居続けられることが本当の意味での幸せなのではないでしょうか。持続可能な教育を考えるうえで、幸せな人生の在り方を模索し続けられる精神や環境こそが、豊かな教育を生み出すと考えます。

浄化の旅

田原 茉莉

帰国後“またダラムサラへ行きたい！”というのが率直な感想である。

自然が豊かであり、人々が温かい。なにより、ダライ・ラマ法王に守られて、人々もまたダライ・ラマ法王を支えている温かい慈愛の連鎖の実現を見たように思う。

このスタディーツアーの掲示を見たとき、絶対に行きたいと内心思った。今回、子どもたちが学ぶ TCV (Tibetan Children's Villages) に行けるというのはとても大きい魅力であり、授業を見学できる他、生徒や教師と直接交流出来ることから、彼らは何を考え、どういったものを重んじているのか、どんな生活風景なのかと想像を膨らませた。また、同時にチベットから逃げてきた人々を受け入れるレセプションセンターへ行けたことも大きい経験となった。

事前学習の際、チベットからダラムサラへ来る人々は、ダライ・ラマ法王に謁見することと、教育を受けることを目標にして子どもたちがやってくると知ったとき、ダライ・ラマ法王の存在感を垣間見た。しかし、実際に行ってみるとダライ・ラマ法王あつてのこの美しい教育体制や文化があることを実感した。

ダライ・ラマ法王と謁見し、その中で聞いた言葉一つ一つが自分自身の体験してきたことにつながり、新たな考え方へのスタートともなった。

一つ目は“Look forward”であり前を向くことは簡単なようで難しいと感じていたが、対話の大切さを教え説かれる中で周りを信じ、前向きな姿勢の重要性を再実感した。このことは、帰国した後、私だけでなく家族にも必要なことだった。母が入院して、日常が返ってこないかもしれない怖さと忙しさに負けてしまいそうだった。しかし、弱さを出さないことと言い訳せずに成し遂げる責任感が芽生えたように思える。

二つ目は“Don't be reserved”である。行動を起こそうとする前に、色々考えすぎて遠慮していた面もあったなと考えさせられた。自分自身、目標としていたのは背中で語る人になるということだったが、話そうとする前に抱え込んで我慢することと背中で語ることは違うと思えた。ダライ・ラマ法王からは、対話を心がける中で相手を信じようとする姿勢を学んだ。かつて、対話をしようと思っても挫けてしまうことや、周囲を信じることも怖いと感じたこともあった。しかし、今思えばそれは弱さであり、守りたい対象がいる対話だとしたら決して対話の姿勢と信じる心をなくしてはならないと心に刻んだ。

また、このスタディーツアーでは、法王が重要視されている教育や文化が継承されている場所を巡ることができた。TCV で目にしてきたことは慈愛の連鎖であり、ホスピタリテ

イがベースになっていた。先生やスタッフの方々が生徒と頻繁にスキンシップをとる光景や授業の中で生徒が常に意見を交わす光景は日本の学校で目にすることは珍しい光景だと思った。また、そんな彼らとコミュニケーション出来たことは、教育学を学ぶ私にとっては、本当に宝となる経験となった。なぜなら、本当に純粋で温かい人たちだったからである。ダラムサラへ行き、関わらせていただいた方々は全員優しく、ホスピタリティに溢れていた。彼らは仲間同士支えあい、純粋にダライ・ラマ法王を敬っている心の純粋さに心動かされる場面は幾度となくあった。また、同時に懐かしい私自身の中高の寄宿時代を思い出していた。私の寄宿生活と比べたら失礼かもしれない。でも、あの寄宿時代に先生方や友人から寛容の精神で幾度なく救われたことは共通していると思った。

いかに教育の中に自立性や寛容を組み込んでいくのか、これから日本の教育の中で考えていきたい点だと思えたのと同時に、共同生活の可能性にも気付かされた。

これからは、相手を想って対話の場を築くことは大切なことだと思えた。心をこめて対話することは、強く意見を述べることだけが社会で通るわけではないことを意味しているように思えた。いつか、私自身、か細い意見も擁護出来るようになりたいと思った。

“生きるということの意味”

—出逢いの先にあるものとは—

榎本 慈子

私は今回のスタディーツアーで初めてインドを訪れました。日々のニュースなどで、インドは人口数が世界第2位（約11億人 2009年推定）で、ここ数年のGDP成長率が4%～6%と目覚ましい発展を遂げている国ということが頭の中にありました。そのためか、市街地には近代的な建物が建ち並び、道路や信号も整備されたほぼ「完成した街」を想像していました。しかし実際に現地に到着し街に出てみると、そこにはまだまだ想像とはかけ離れた光景が目の前に広がっていました。整備された道路もあれば、そうでなかったり、建物も古くからの街並みに1つだけ近代的なビルが建っていたりしていました。インドは今、発展の真只中にあり、環境や社会などあらゆる面における持続可能性を秘めている宝箱のようでした。10日間、そんなインドを旅する中でたくさんものを見て、聴いて、触れ、多くの方に出会いました。私はこの旅を通して強く印象に残ったことが2つあります。

1つ目はインド独立の父といわれるマハトマ・ガンディーです。私たちはデリーでガンディー博物館や記念公園を訪れました。博物館には数多くの写真と共に彼が最期に着ていた服などが展示してありました。さらにそこにはたくさんの言葉が添えられており、中でも特に印象深かった言葉が“My life is my message.”という言葉です。彼は“塩の行進”をしたり、自らが断食を繰り返し続けることで民衆に訴え続けました。この言葉どおり、ガンディーは自分の人生をもって民衆をインドの独立へと導いたのです。私たちが施設などを見学している最中、地元の人々がたくさん訪れお祈りなどをしていました。ガンディーが亡くなって70年以上経った現在でも、彼がインド国民にとって心の拠り所となっていることを感じました。ガンディーは当時の人々だけでなく、今を生きるインド国民の心の中でも生き続けていました。ガンディーに限ることなく、自分が死んで何十年経っても、自分のことが人々の記憶に残っているということは、本当に素敵なことだと思います。生きがいや人生の目標は人それぞれですが、私も、自分がこの世を去った後ずっと、私と出会った人々の記憶に残るような道を歩みたいと思いました。

2つ目はダラムサラで触れあった方々です。もちろんダライ・ラマ法王とお会いし、対談することができたことは文章では綴ることができないくらいの出来事です。さらに私はダラムサラで宿泊したチョノールハウスの方やチベット子ども村(TCV)で出会っ

た先生方・子どもたちがとても印象に残りました。チョノールハウスで働く人の中にはチベット子ども村を卒業した方もいました。とても気さくなお兄さんや、私たちの世話をしてくださったお姉さんたちがいて、まるで一つの家族のようでした。チベット子ども村でも、大きな大家族をみているようでした。たくさんの幼い子どもたち、ちょっぴり大きな上級生のお姉さんやお兄さん、元気でエネルギーギッシュな先生たち、同じ境遇や想いを抱いているからこそそのコミュニティがありました。特に印象的だったのは授業風景です。初等部から高等部まで見学させていただきました。どの授業も勢いのある授業ばかりで、教材や教具（例えば給食のゴミとしてでた牛乳パックを単語カードに再利用）がとても工夫されていました。先生と生徒の声がりずみカルに響き渡り、真剣で真面目な授業なのですが、本当にとっても楽しい授業ばかりでした。チベット子ども村では子どもも大人も分け隔てなく一人ひとりが深い愛情をもって、みんながそれぞれに愛情を分け合い、助け合って生活していました。その空間の中で人生の一時を過ごせたことを心から幸せだと思います。



今回のスタディーツアーを通して、たくさんの人と新しい出会いがありました。人に出会うということは、縁やタイミングなどもあると思います。このツアーに参加し、デリーやダラムサラを訪れ、本当に恵まれた幸せな時間を過ごすことができました。この旅で出会ったすべての方々に感謝したいと思います。

難民がつなぐ希望への道

下里 祐美子

“希望のないところに、人生はない” この旅を終えて、今一番強く思うことだ。チベット子ども村(TCV)の先生、そこで学ぶ生徒たち、そしてダライ・ラマ法王との出会い。その一つ一つが、冒頭の言葉を私の中に強く印象づけた。

高校 3 年生の時、日本に暮らすクルド人難民に出会った。「明日生きている保証はない」と涙を流しながら話す彼らを前に、私は初めて、この世界に存在する不条理を知ったのだと思う。それから、なぜこの世界には<加害者-被害者>の構造が存在するのかが疑問だったし、先進国に暮らす以上、私は多くの場合において加害者であることから逃れられないということも知った。

3 月 11 日、東日本大震災が日本、そして東北の人々を襲った。同時に原発問題が明らかとなり、福島原発周辺に暮らす人々は遠隔地への避難を余儀なくされた。そんな彼らもまた“避難民”と呼ばれ、故郷を離れなければならなくなった。私は今、福島から東京へ避難してきている小学 6 年生の学習支援をしている。今日は何をしようか？といった質問を投げかけて彼がしたいことをする、という感じなので、遊びだけで時間が過ぎることも多い。いつだったか、彼とキャッチボールをしたことがあった。その中で、彼がこぼした言葉が忘れられない。

「ぼく、放射能でべちゃべちゃなんだよ。」

この言葉を聞いたとき、返す言葉が見つからなかった。まだ 12 歳の子どもの、こんな言葉を言わせてしまうこの社会に対して、そして何よりも、その社会の一員として様々な不条理を見てみぬ“フリ”をしてきた自分自身に腹が立った。本当のことから目をそらし、幸せでいられる方を選択してきた私自身の生き方が、目の前にいるこの少年の苦しみを生みだしていると思った。

“彼の為に何が出来るのか”・・・自分勝手であり、傲慢だと思われても仕方のない問いの答えを求めて、私はスタディーツアーに参加した。ドラムサラで出会ったのは、自分たちの辛い経験を辛いままで終わらせることなく、他者の苦しみに寄り添うことのできる人たちだった。TCV の学生は、震災の現状をテレビで知り、目に涙をためながら「日本のために祈っている」と私に話しかけてくれた。彼女は、12 歳のときにヒマラヤを越えてインドにやってきたのだという。彼らの人生の壮絶さは、私には計り知れない。自分たちが経験してきた苦しみに悲観的になることなく、他者の苦しみに純粹に寄り添う姿に心をうたれた。これが“慈悲”というものであり、TCV の理念である“Others before self”を体現し

ているのだと思った。

ダラムサラで何度も思い出したのは、神谷美恵子『生きがいについて』の中のワンフレーズだ。

“自己をふくめて人間の存在のはかなさ、もろさを身にしみて知っているからこそ、その中でなおも伸びてやまない生命力の発現をいとおしむ心である。そのいとおしみの深さは、経て来た悲しみの深さに比例しているといえる”

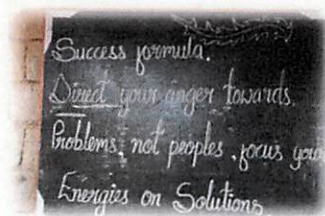
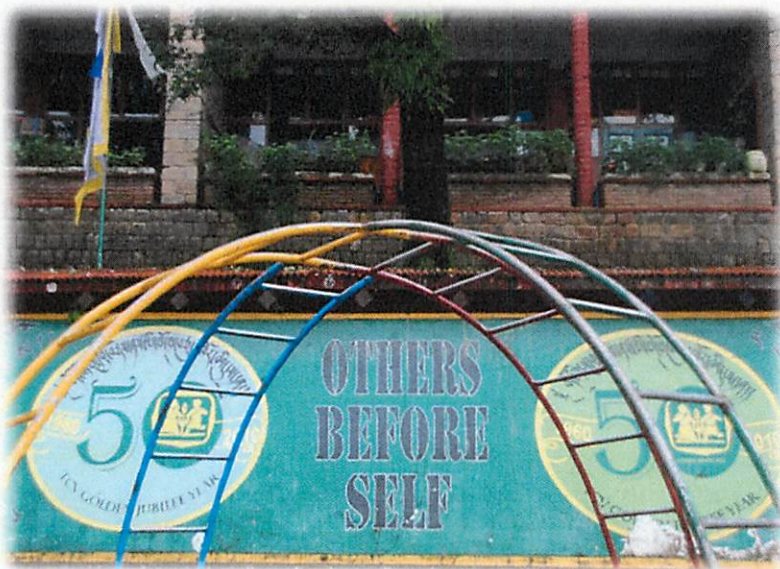
苦しみを生きて来た人だからこそ出会える優しさがあり、つらい経験があるからこそ、心からの希望が描けるのだろう。

私の人生の分岐点には、いつも“難民”との出会いがあった。高校生の時、難民との出会いが私に問うた生きる上での大きな疑問は、数年後、また新たな難民との出会いで少しずつ未来へと繋がりつつある。私たちは誰もが潜在的な当事者だ。私たちがどんな意思を持ってどんな今日を選ぶかで、きっと未来は変わっていく。

日本に帰り、福島から来た少年との日々がまた始まろうとしている。苦しみの中を生きる彼だからこそ描ける希望の形があるはずだ。希望のないところに人生はないと信じたい。

8. インド写真館

チベット子ども村(TCV)にて。たくさんの素敵な出会いがありました。





ガンディーについて学びます。ラージガード・ガンディー博物館





テンパさんとお食事！とってもおいしい料理を囲んで。



法王公邸前で問答の見学



空は無限かー！？それはなぜだー！？

仏教論理大学で学ばれている山口さん。
わかりやすく、深い学びをいただきました。

CHONOR HOUSE (ダラムサラのホテル) で一日のふり返し



今日はどんな一日だったかな??

チベット文化村でチベット文化を堪能しました。



朝のお散歩。ホテルをぐるっと一周。



法王様と対話の時間を持つことができました。
とても豊かで幸せな空間でした。



難民受け入れセンター（レセプションセンター）
ヒマラヤを超えた子どもたちがここにたどり着きます。



いよいよ帰国のとき。

行きはバスでタラムサラへ向かいましたが、帰りは飛行機でデリーへ。
さよなら、タラムサラ！



デリー空港で、最後のふり返りです。

インドでの日々を、「つぎ」につなげる大事な時間。



成田空港に全員無事に到着！

日本から持ち込んだゴミと一緒に帰国です。



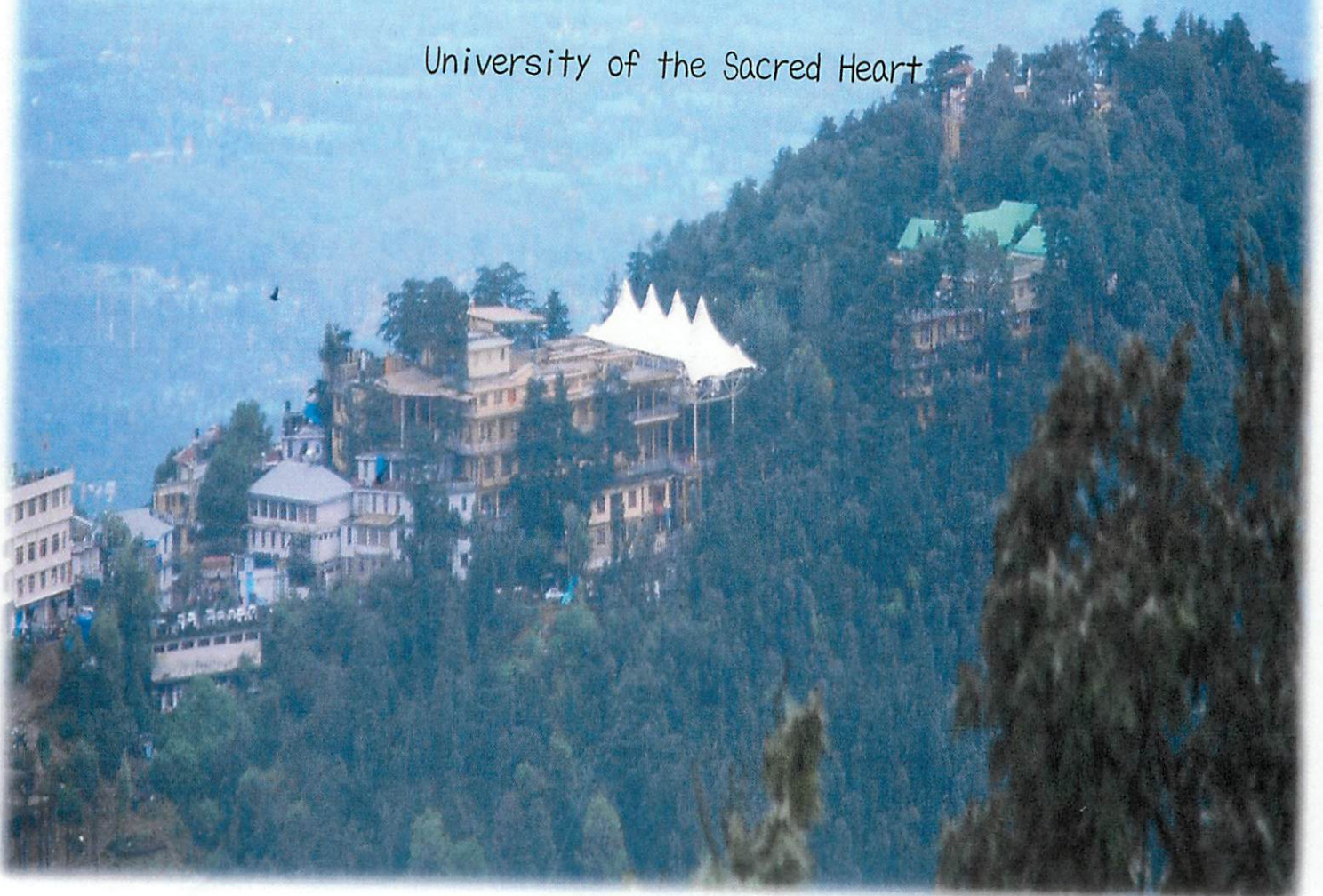
ESD Study Visit Report

Thinking about the Road to Hope with Refugees in North India

2011. 8. 24~9. 2

India (Delhi • Dharamsala)

University of the Sacred Heart



Part II. English Report

FORWARD

“Living a life without answers”

The first term after the Great East Japan Earthquake and Fukushima Daiichi Nuclear Disaster started in April 2011. Because of the unprecedented catastrophe, the start was postponed for two weeks. The above words occurred to me when I saw students with rather anxious expressions in the first lesson, probably owing to a lingering destabilized situation in the Japanese society with aftershocks and aftereffects from the radiation accident. In the post-modern world, unanticipated things could happen at any time. Nevertheless, the young are expected to live through uncertainty and instability of such risks in society.

There were students who are willing to do something for survivors in the disaster-stricken areas, but did not know where to start and ended up with a feeling of spiritlessness. Because of their uneasiness, they felt like holding on to something trustworthy. However, unreliable decision-making processes and actions of the government for the recovery after the earthquake failed in meeting their expectations.

The 5th ESD Study Programme was conceptualized in the midst of the unforeseen social disorders. The author thought that Dharamsala, a city in Northern India was the right place to visit for the programme. The town is the place where Tibetan people as refugees have lived with hope since the 1959 uprising. Even after the flight from their own homeland, the Tibetan community has continued to keep and enhance their own culture, as well as re-creating a new culture, too. Supported through international aid by United Nations High Commission for Refugees (UNHCR) for refugees, the project for the Tibetan people is said to be one of the most successful cases since World War II. My wish was that meeting with the people who have never lost hope would surely have a positive effect on the Japanese students.

Also, the city is well-known because His Holiness the Dalai Lama lives there and therefore, functions as the base and center of Tibetan culture and politics. The 14th Dalai Lama is a spiritual leader of the Tibetan people as well as the Nobel Peace Prize winner, who sends important messages to the world community, such as “universal responsibility.” As indicated in the meaning of his name, he is the “Ocean of Wisdom.” His teachings on Buddhism as science, philosophy and religion attract many, including youth from around the world.

It has been a long time since the author first started to think about the possibility for Japanese students to meet the “Ocean of Wisdom.” Especially after the 3.11 disaster, this wish became even stronger. Indeed it is easy for our students to find experts to give them the answers to their questions. But there is reason why I had such a strong feeling towards him; that is, His Holiness the Dalai Lama is a rare type of person with special talent by which he guides us to find our answers on our own, or leads us to live through life without having answers to our questions, instead of getting answers that satisfy us only for the moment.

The students who participated in the study programme spent many weeks in preparation, thinking about the kinds of questions they should ask His Holiness the Dalai Lama. As already mentioned, each student had questions stemming from uneasy feelings they held after the 3.11 disaster. However, they realized that if they were to ask a personal question, it would not be appropriate as His Holiness is not a counselor nor a psychiatrist. Students discussed with each other and each gave careful thought to what the questions should be. As a result, they found only several questions suitable for the occasion. Even if some of the questions were created from personal experiences, after contemplation, the questions somehow evolved into more universal ones:

Q1: There are many survivors suffering after the Great East Japan Earthquake. We cannot replace ourselves with such heartbroken people who have lost loved-ones and/or houses. We sometimes feel helpless in front of others who are carrying an unbelievable burden on their backs. What could we do for them?

Q2: If you (His Holiness the Dalai Lama) were a school principal, what aspect of education would you value most?

Q3: I have doubts about volunteer work, as some seems very superficial. What is true volunteerism?

Q4: When you (His Holiness the Dalai Lama) were invited to one of the conferences held at the time of the Earth Summit in 1992, you presented a timely concept of “universal responsibility.” If you were invited to the next conference, the Rio+20 Earth Summit in 2012, what concept would you deliver to the world community?

Q5: It has been said that international understanding is indispensable for world peace. But while making efforts in understanding others, if they are indifferent

to us and do not listen to us, what can we do then?

Our journey started with retracing the historical steps of Mahatma Gandhi. Visiting the Raj Ghat where there is a marble platform making the spot of Gandhi's cremation, the Gandhi Memorial Museum with courtyard where Gandhi fell to an assassin's bullet, as well as the National Gandhi Museum and Library. Because of the cancellation of a domestic flight to Dharamsala, we had to take a half-day trip by mini-bus, leaving Delhi before dawn and arriving there before dark.

When we arrived at a traditional hotel, we were met with warm-hearted hospitality and wonderful smiles, which gave us strength in overcoming our weariness. Our stay in Dharamsala was a succession of encounters which students could never experience on campus. The author would be grateful if readers of the report will understand how the students felt through their experiences in India; how they made up their minds to cope with challenges in the days after the catastrophe; what kind of answers they received from His Holiness the Dalai Lama and what sort of ideas they have brought back with them after their audience with him.


Last but not the least, I would like to convey my gratitude to the people who helped me to organize the study programme. It would be impossible to enjoy the exchange with teachers and students of the Tibetan Children's Village and the audience with His Holiness without having the dedicated support from Mr. Lhakpa Tshoko of the Liaison office of H. H. the Dalai Lama for Japan and East-Asia, Mr. Tempa Tsering, Representative of the Bureau of H.H.The Dalai Lama and Mr. Kunsang Dorjee, protocol officer, Mrs. Sonam Sangmo, Tibet support group liaison officer, Department of Information & International Relations, Central Tibetan Administration and Mr. Tsewang Yeshe, President, Mr. Tenzing Sangpo, Education Director, Tibetan Children Villages and Ms.Naoko Yamaguchi, research student of Institute of Buddhist Dialectics in Dharamsala. I would also like to extend my thanks to the people and institutions to which the students went and asked questions for their pre-survey. My sincere gratitude also goes to the staff and faculty members of the University of the Sacred Heart, Tokyo, especially to Mr. Naoki Mizushima who participated in the ESD tour for the first time and shared the deepening process of our learning.

December 2, 2011

Yoshiyuki Nagata
Programme Director,
Associate Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

1. Schedule



		Activity	Location
Day1 8/24(Wed)	11:30	Narita Airport (Departure) (Departure from gate 46 to Singapore. The distance	
	19:05 22:10	vered is about 5500km.) Singapore (Via) Indira Gandhi International Airport (Arrival) (We spent hole day. At the airport, we gave a beautiful wreath by a tour conductor.)	Dehli
Day2 8/25(Thu)	AM	Observe a Raj Ghat (The place where Gandhi was cremated. The garden was green and very quietly.) Observe a Gandhi Museum (Building was white. In the building, we observed with feeling the heat of indigenous to India.) Observe a National Gallery of Modern Art In the three-stroied building, there were many landscape, painting of folk and carving.)	Dehli
	PM	Dine with Mr.Tempa We had a lunch with Mr. Tempa who is representative of His Holiness The Dalai Lama.) Observe a Gandhi Memorial Park (The place where Gandhi died. A lot of local people visited and worshiped.)	
Day3 8/26(Fri)	All day	From Dehli to Dharamsala (We drove for 15 hours to Dharamsala where distance about 530km from Dehli. Dharamsala is Northern in India.)	Chonor House
Day4 8/27(Sat)	AM	Visit The Office of Reception Center (We met tibetan children the first time this tour. We were talked about refugee condition recently by president.) Observe The Tibetan Institute of Performing Arts (We met students who are a Tibetan refugee. They producted a mandala and a statue of Buddha.)	 Chonor House
	PM	Lecture of Dialectic Institute by Ms.Yamazaki (Ms. Yamazaki is student University of Buddhism-logic. Location is Namgyal Gompa.) Observe of Dialectic at Namgyal Gompa (We observed Dialectic by monks. It was a first time for us. It was very powerful and energetic.)	
Day5 8/28(Sun)	AM	Move to Tibetan Children's Village (TCV) (We moved to TCV. First, we were talked about TCV by president.)	Guest House(TCV)
	PM	Walk around at TCV (In TCV, it have houses, each section schools, grounds and temple. Some children played football. We walked around. The mind became peaceful.)	



Day6 8/29(Mon)	AM	Visit TCV kindergarten (Children from 4 to 6 studied. Each students have each small desk. Students learned individual subject.)	Guest House
	PM	Audience with His Holiness (we met His Holiness at Namgyal Gompa. We could talk about for an hour. It had a special time.)	
Day7 8/30(Tue)	AM	Take part in Public Teaching by His Holiness (This teaching hold for South East Asia. In early morning, people made line to enter the gate.)	Guest House
	PM	Visit TCV high school (Each classes have 35 students and 1 teacher. Students shared their text book because of limited a umbers.)	
Day8 8/31 Wed)	AM	Visit TCV primary school (Children was so acitive and aggressive. Teachers also too. Classes was done in Tibetan.) Vist TCV junior high school (Students practiced Dialectic. Teachers are monks. They used with all their strength and hearts.)	Guest House
	PM	Visit a Studio of kraft by Mrs. Tenjin (We met Mrs. Tenjin who is English teachers. She also graduated TCV. She made tool of studies by recicle cartons.) A ceremony of grtitude (Farewell Party) (We held ceremony about thank of TCV. We invited teachers and some students.)	
Day9 9/1(Thu)	AM	Departure from TCV (We departed from TCV. We were saw off by taking care for us.) Observe the Dolma Ling Nunnery (We observed English classes and charge for a meal so on	Flying overnight
	13:05	Dharamsala Airport (Depature (For 15 hours by car. However this time, for an hour by fight.)	
	23:25	Indira Gandhi International Airport (Arrival)	
Day10 9/2(Fri)	9:25	Singapore (Via)	
	17:30	Narita Airport (Arrival) (We could come back to Japan with all members.)	



2. List of Participants

Mr. Yoshiyuki Nagata

Associate Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : yoshy@pobox.com

Mr. Naoki Mizushima

Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : mizusima@u-sacred-heart.ac.jp

Ms. Rei Horie

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : rei.horie@gmail.com

Ms. Tamami Yamazaki

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : tamami0316happysmile@yahoo.co.jp

Ms. Mari Tawara

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : Dona2_awake_greentea@yahoo.co.jp

Ms. Enomoto Chikako

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : chikako.enomoto@yahoo.co.jp

Ms. Yumiko Shimosato

Research student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email : song1016mc@yahoo.co.jp

3. Our Feelings

—Impressions of the Study Programme—

Art Education in TCV

Naoki Mizushima

I had a good opportunity to think about a role of the art education by this TCV visit. In the kindergarten, Montessori method was adopted, and an important point was put for "the sense education". The art class at the secondary level was carried out by Mr. Tsering Tashi who started for his new post as an art teacher from 2011. His instruction is based on a method by traditional painted copy. The students can choose a drawing subject based on individual interest. At the Dalai Lama temple in TCV, some graduates engaged in the decoration in the temple as tanka craftsman. In the art education of TCV, transmission of the Tibet culture is compatible with individual personality.



In the kindergarten



The ORIGAMI works : color and form have some meanings



Sketchbooks in the art classroom



Well-maintained brushes



The students drew it based on copybook which Mr. Tsering Tashi made.



Mr. Tsering Tashi and his priest student



Decoration to the building of the temple

Message for Hope

Rei Horie

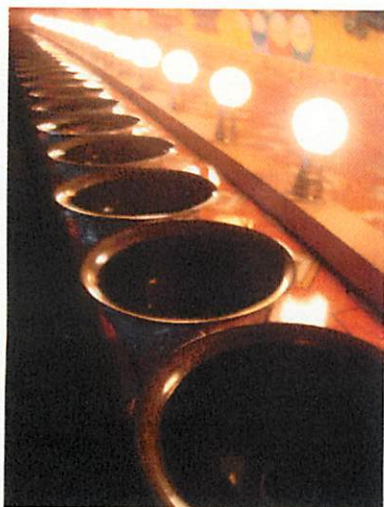
I vividly remember one passage that the Dalai Lama XIV said to us. "You have to rebuild from ashes. Forget tragedy and look forward." He gave this message to Japan, where the big earthquake had occurred. I received the passage all the more carefully for there was a fact that he realized a government in exile in the past. There was a miracle world where people had a merciful and strong heart no matter what happened and carried out the message although they faced the danger of extinction.

"The future of Tibet depends on us. So I want to study harder and do something for Tibet in the future," a high school student said to me fluently in English who was expelled from his country and defected to India. I should say I was struck when I heard it. Then I respected him and felt impatient and helpless because I was so immature, so all I could do was say to him, "Great."

Lose the country—I can't even imagine it because I live every day freely. I won't experience it in the future, either. The "country" Tibet has been ruled since China occupied it in 1951. Officially, the "country" has been supported, but actually almost all the cultural and religious assets of it have been destroyed and it has been developed haphazardly by China. In school, children are forced to speak Chinese and gambling, smoking and prostitution are widespread among them. Parents send their children to the government in exile that the Dalai Lama XIV established to break such a situation and have them receive reliable education, knowing it is quite a dangerous journey. For them, education is the only way they can recover their identity and hope to pass onto the next generation. That is why education plays an important role.

Tibetan Children's Villages(TCV), which we visited, is a boarding school where as many as 16,000 students (kindergarteners, elementary schoolchildren, junior high school and high school students) are educated carefully. They adore their dormitory mothers called "Mother" as if they were real mothers. There are close bonds between students and teachers. Once you see the class, you can tell it. Students were keen on listening to the teacher who taught in his way without a textbook. What I admired the most was the dialectic lessons. In this debating class, students need to break other students' logic, so it was good chance for them to demonstrate and acquire what they

had learned. The teacher who advised the heated debate and the students who made the class independently, both of them were one in body and mind. I saw in them what education, which is “work for hope,” should be. This energetic education site is the very world where the message of the His Holiness the Dalai Lama is embodied.



When I came back to Japan, I saw the news related to the earthquake after a long time. At the same time I remembered I was almost overwhelmed by the site where there was still much rubble when I visited a stricken area to do volunteer work this summer. It is true that I won't lose my country as long as I live in Japan, but we are facing the reality where many people die and lose their town. “Forget tragedy and look forward.” Now is the time for us to look forward and take action. What I can do as a college student is, I think, practice revival support one by one, bearing in mind the messages sent to us by Tibetan people, who find hope out of despair and keep on looking and moving forward.

Fate is something

Tamami Yamazaki

“Fate” is something.

In the process of going through life, I was wondering how one should live with others and community. While such a thought was in my mind today, and now I found myself living in a hurry, desperately frightened with something invisible.

The Great East Japan Earthquake...

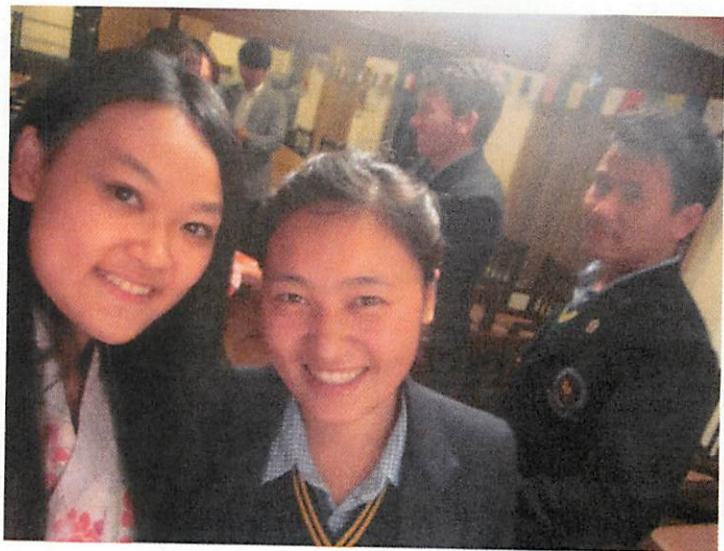
Encounter with this unknown threat might have given me a great impact.

India touched upon me with such difficult feelings. The feelings and thoughts I felt in the land of Dharamsala provided me with an important turning point.

Delhi was a city with beautiful flowers and mixed garbage. A woman standing on the street wrapped in gray and glittering. I was wondering if maybe girls were playing their own roles.

Tibet, I found Tibetan people who live through the message of the land cared by His Holiness, and the heaven and land filled with their message.

Education will relive people. Education will support people. I can find happiness knowing that one can keep on learning in his or her life from birth to death.



A Journey of Sublimation

Mari Tawara

After I came back to Japan, my feeling was that I will truly visit Dharamsala again! The town was filled with nature and kindness. Especially, His Holiness the Dalai Lama devotes himself for Tibetan people and Tibetan people also support His Holiness. I felt it was a “linkage of compassion.”

In June, the poster of this study tour came into my eyes, “I want to go ! Absolutely!!” It attracted me to stay at TCV where children are studying. I also imagined how it was wonderful if I would be able to visit classrooms, communicate directly with students and teachers, and ask what they believe in, value, and the way in which they live.

When we had pre-study before going to Dharamsala, I just knew that the children’s aim was to have audience with His Holiness, to study subjects based on Tibetan culture. I thought His Holiness has the biggest presence. But after I went to Dharamsala, I came to know their education system and culture are firmly based on His Holiness.

During the audience with His Holiness, his every single word connected me with what I have experienced. This brought me to start new ways of thinking.

There are two statements that impressed me. The first one is his words, “Look forward.” Yes, it is apparently easy, but I know it is difficult to practice. While listening the importance of communication. I realized it is to believe people around me, and positive thinking is important, too. After I came back to Japan, I realized positive thinking is important, not only for me but also for my family. When my mother was sent to the hospital, I was afraid of my busy daily lives and if the normal life would never back. But, I got stronger without showing my weakness and freed to hide my feelings by making some excuses. The second one is his words “Don’t be reserved.” Previously I had a tendency of thinking about a lot of things before taking action. My message before was understood by looking at my back. But, I realized there are differences between being reserved and paying attention to my back. From His Holiness, I learned believing is important. I have challenged myself to believe other people. I need to be discouraged

during conversation, was afraid of believing people around me. Now, I realized there comes direction from my weaknesses, I could firmly believe I should not escape from avoiding communication if I want to believe in people.

We visited a few educational and cultural places where His Holiness regards as important. What we have seen in TCV was a real “linkage of compassion” that was based on hospitality. I could see teachers and staff frequently humane contacts and discussions with their students. As I major in education, it was during these precious experiences that I could contact with them. It's because they have very pure minds and gentle hearts. All the people whom I met in Dharamsala, were gentle and full of hospitality. They support each other and respect His Holiness from the bottom of their hearts.

At the same time, I recalled my junior and high school days. I spent the school days in a dormitory. I know it is strange to compare with my schooldays, but, I felt similar warm atmosphere that I was relieved many times by my teachers and friends while I was staying at the dormitory.

I have realized that I need to think deeply how to include teaching the spirit of self-reliance and tolerance. I have also realized the importance of living together. From now on, it becomes crucial to create opportunities for communication with full support for people. I believe sincere conversation would be much stronger than argument with a loud voice. Someday I wish I could be someone who can protect people with feeble voices.

Meaning of my life: What is beyond the Encounters?

Chikako Enomoto

It was the first time for me to go to India. Today, India has about 11 billion people which is the second largest population in the world. Also the has Gross Domestic Product(GDP) growth increased from four to six percent, recently. These news made me think of India as a rapidly developing nation. Therefore, I had an image I India “a completed modernized city” with modern buildings and well-paned roads and so on.



However, I found that it was wrong the image when I visited there. The roads were not good. Buildings are not new. Most buildings are old. I have learned that India has been still under development. It is as if India were a treasure box including possibilities for sustainable society and environment. In ten days, I heard, saw and experienced a lot of things. Also I met a lot of people. Especially, I was impressed by two things through this tour.

One thing is about Mahatma Gandhi. We visited the Gandhi Museum and the Gandhi Memorial Park in Delhi. At the museum there are so many pictures including clothes he wore when he died. Moreover these are together with many phrases. Especially, one of the most impressive phrases was “my life is my message.” He appealed to populations through his deeds and campaigns such as, The Salt Satyagraha and fasting by himself. Certainly, he lead India to an independent nation from England. Many local people visited and prayed while we observed institutions although it has been about 70 years since he died. Gandhi has been a support of mind for peoples living today. The evidence of his life can be seen as Gandhi living within people memories. Each person has a different meaning of life. However I would like to live as he had lived.

The second thing is about Dharamsala. Of course, it was beyond expression

that me could have an audience with His Holiness. Furthermore, I was impressed by people who were working at Chonor House, at TCV and children whom we met at TCV. At Chonor House, there were a few staff who graduated from TCV. They were very nice women and a friendly man. It was like one big family. TCV has a good community with great teachers and great students. Especially, I was impressed by the lessons. We observed some classes of each section from kindergarten to high school. All the classes were active and energetic. I was surprised by "tools". For example, word cards made from milk cartons. Every class was enjoyable. Each person who lives at TCV has compassion. Everybody helps each other. This time, I found myself so happy because I was given such as opportunity to spend special moment at the unique community in my life.

Through this tour, I could "encounter" a lot of people. I think that whether we can meet them or not may depend on a turn of fate. I had one of the greatest time at Delhi and Dharamsala in my life. I appreciated all things I have experienced through out this tour.



A Road to Hope Connected by Refugees

Yumiko Shimosato

“Where there is no hope, there is no life.” After the end of this trip, this is now what I have most strongly come to believe. I met teachers of the Tibetan Children’s Villages (TCV), the students studying there and also His Holiness the Dalai Lama. Each one left in me a strong impression as shown in my opening statement.

On March 11, the Great East Japan Earthquake struck the country and people living in the area near the Fukushima Nuclear Power Plant were forced to flee to remote areas. They were called “refugees” and had to leave their hometowns.

While I was assisting an elementary school student who had evacuated to Tokyo from Fukushima to study, I continued to think “What can I do for him?” Thinking it would be good if I could find an answer to this question, I joined the study tour.

The people whom I met in Dharamsala were those who could reach out to the sufferings of others and stay with them without keeping their own painful experiences, which are just nothing but painful. A student of TCV who was aware of the Earthquake situation from the television said to me with tears in her eyes, “I will pray for Japan.” She was a female student that had made it to India after crossing over the Himalayas at the age of 12. What struck me was the sight of these students who, instead of becoming pessimistic with their own experiences, got genuinely close to and stood by others who were suffering. I think for me this sight was the true embodiment of the philosophy of TCV, which is “Others Before Self.”

The thing that I recalled time and time again in Dharamsala was one part in one of the books written by Mieko Kamiya, a Japanese author *On the Meaning of Life*.

“Through understanding the transience and fragility of human existence including one’s own, one can appreciate the emergence of a life force which never ceases to grow inside. The depth of such appreciation corresponds with the depth of sadness that one has experienced.”

I believe that one can be grateful to meet people because of his or her sufferings in life and that one can draw a picture of hope from the bottom of the heart from bitter experiences.

After returning to Japan, I once again restarted spending my days with the boy from Fukushima. I am sure it is especially because he is living through suffering that he can draw a figure of hope. I would like to believe that only where there is no hope there no life. I think that I can leave our future to think about the little boy.

ESD スタディーツアー報告書
北インドで難民の人々と共に考える「希望」への道

発行日	2011 年 12 月 9 日
発行	聖心女子大学文学部教育学科 永田佳之研究室 〒150-8939 東京都渋谷区広尾 4-3-1 Tel&Fax. 03-3407-5914 E-mail : yoshy@pobox.com
印刷所	チヨダクレス株式会社 フェデックス キンコーズ・ジャパン株式会社